

# 自分の作った小説の主人公に転生

ロイ1世

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

砲撃の衝撃波で頭を打ったその日、彼は思い出した。

『ここ自分の小説の世界じゃん!!』

そう、彼はかつて自分が書いた艦これの二次創作の小説の世界、更に言えば主人公に転生していたのだ。

このままでは世界は比較的ハッピーエンドだけど俺が死ぬ、そう思った彼は覚えている限りの記憶を頼りに最高のエンディングを迎えられるよう奮闘する。

## —— 諸注意 ——

誤字、脱字、可笑しい日本語、原作崩壊、コマン道（微量）、その他諸々があります（予定）

作者の妄想が99.999...%を占めます。

投稿主がかつて投稿した艦これの二次創作作品の二次創作（？）ですが、大なり小なり違うことになりました。（建前）なるのかな？（本音）なりました（希望）

元の作品は「私は彼女達の橋」ですが、それを見なくても楽しめる

よう作っていく所存です。

## 目次

あら・・・あらあら（焦り）	1
死ぬのになんかどうでもいい天気（死にたくないです助けてください）	4
肉体は覚醒したけど覚悟が決まってないのでそっとしておいてください。	11
未来に向けて全速漸進	16
お邪魔するよ、悪いけど	21
開ける、死刑だ!!（任務を無視した私刑）	28
祝 入隊	35
敵を討ち滅ぼす簡単な仕事です	40
役得役得ウ!!	46
おひさ	50
南国の島でバカンス：にはならない	55
嗚呼、懐かしき	59
化物	64
まだ始まっていない	70
脱出	75
三人組	82
監査	86
確信	92
証言	94
ミス	99
演者	106
解放	111

あら・・・あらあら（焦り）

「伏せろおおお!!」

「ロイいいいい!!」

アフリカの大地でロケット弾の衝撃波で吹き飛ばされ、家の瓦礫で頭を打った時、思い出した。

この世界は多分俺の作った小説の世界だ。

私は彼女達の橋

いつものように艦これの妄想を楽しみながら湯船に浸かっていた時、思い付いた作品だ。

謎の超技術を持った男がブラック鎮守府を襲撃し、その提督を逮捕。その鎮守府の指揮を執りながら深海棲艦『私は彼女達の橋』では人間とドンパチやっているのは極少数の深海棲艦という設定。なので平和を模索している勢力が大半。の組織『親衛隊』深海棲艦の女王直属の部隊。裏工作や特殊作戦、その他大つぴらに言えないことをやる。深海棲艦の実力がトップクラスの存在や必要と見なされた人間が所属の為に活動するという内容。

最終的には敵の首領を殺害し、親衛隊の計画の成功にも大きく貢献をし、来世の幸せを約束される・・・

が、今世：特にケツコンカッコカリ後から悲惨な運命を辿る。

まず、ケツコンをした艦娘が行方不明——敵勢力に捕まり、拷問の後死亡——になる。

そして最終決戦でまず死線を潜り抜けてきた仲間が轟沈。他にも技術指導をしてもらった先生と呼び慕う仲の艦娘が轟沈したり、配下の艦娘も多く轟沈する。

拳句は主人公——つまり俺——が相手と相討ちになる形で死ぬ。

まじで地獄で草も生えん。よくこんなクソダメみたいな案考えたなあ過去の俺!!

と、とにかく最善を尽くそう。

人間と深海棲艦の戦争の火種となった移民団虐殺事件（仮称）環境

汚染を如何にかする為の深海棲艦の移民団が虐殺された事件。移民を提案したのはアメリカで深海棲艦の技術欲しさにやった。生存者は護衛の為に艀装を装着していた5人だけ。この事件がきっかけとなって人間と深海棲艦の戦争が勃発する。尚、本作では艀装を着けていない艦娘と深海棲艦は基礎能力は高いけど銃で撃てば普通に死ぬ設定。は場所と時期の特定がほぼ不可能なので開戦は確定だろう。なら最期を変えるしかない。

そう決心した所で、俺は頭からの出血によって意識を失った。

「上を向いてください」

意識を取り戻したのはアラビア半島の先つちよにある国イエメンのアデンにある、軍病院だった。

「日本軍、横須賀陸戦隊学校実地訓練生、ロイ・ヴィツフェ・ヒドルフ。スーダンのカツサラ郊外の戦いで負傷。しばしの療養を必要とする」  
禿げた眼鏡おじさんの診断結果を聞きつつ、改めて考える。

ロイ・ヴィツフェ・ヒドルフ：これが俺だ。癖などは自分をモデルにしたので、一人称は俺、誰かと話すときは私。好物等は分からない。確かそんな描写はなかったはずだ。

父はドイツの海軍軍人、母は日本人と聞かされている。二人は日本で出会った。父が日本に派遣され、休暇中に出会ったらしい。母は俺を産んですぐ死んだ。父は日本に派遣されている間に起きた尖閣動乱尖閣諸島に接近していた中国の水上艦隊と交戦した事件。中国は計8艦隊を最終的に出しても日米英仏独伊の連合艦隊に殲滅される。際に出撃し、戦死した。当時5歳に満たなかった俺の後見人は父と親しかった山吹 智久（当時少佐）で、実質的な養子だった。

身体能力はとても高く、覚醒したといえる中学生の時期は身長184cm（このあと身長は伸びなくなった）になり、力がかなり強く喧嘩（一方的に吹っ掛けられたもの）では負け知らずである。それを活かすのと亡き父、育ての父の影響を受けて陸戦隊の訓練学校に入学する。

そして起きたスエズ戦争スエズ運河付近の地層に大量の希少金属

が眠っていることがきつかけで起きた戦争。日本は石油タンカーの撃沈を受けて参戦。次々と新兵器が生まれたことから100年兵器技術が発展したと言われている。深海棲艦の登場によって有耶無耶になる。に派遣され、現在に至る。

「はあ」

病院の景観をよくするために植えられた木を見つつ溜息を吐く。

傷はすぐに治る。体質故に。しかしその後の問題がある。

このままいけば俺はいずれ移民団の生き残りと合流するだろう。そのときに既存兵器で深海棲艦に対し攻撃を仕掛け、生還。その後日本に帰国する。

深海棲艦は深海棲艦にしか倒せない。この点をロイはクリアしているが（後述）既存の兵器しかないので効果的に戦えない。そのくせ敵は艦砲なので防弾チョッキ等は意味がない。スペランカーである。補正がかかることを期待したいが油断はできない。直近のイベントで一番死ぬ確率が高いのは移民団の生き残りと合流し深海棲艦と戦う：紅海の奇跡である。

それまでに、しっかりと休むとしますか…

死ぬのにちょうどいい天気（死にたくないです助けてください）

### 『紅海の奇跡』

物語では本編開始前の出来事として済まされている。

艦娘の存在が初めて確認された戦いでありながら、初めて深海棲艦の撃沈に成功した戦いだ。

さつきも言ったとおり本編開始前なのであっさり、概要だけが書かれているので詳細や何をやったのか分からない。

だがこの戦いさえ切り抜ければ日本に帰れる。その後はPTSDで少しの休暇も約束されている。

「頑張りますか」

そう呟きながら病院のベットから抜け出し、情報収集の為隊に戻る。市内に基地があるのでタクシーを捕まえれば帰ることができるだろう。財布には三万入っている。

病院服から軍服に着替える。ここは軍病院だ。軍人がいても誰も不思議に思わない。だが病院関係者：特にあの眼鏡禿げの腕のいい医者と担当した看護師に見つからないよう階段から降りる。

病院を出る。夜の風が肌を撫でて寒い。

前世では一度も海外に行ったことがなかったからか、途轍もない違和感を感じる。

：違うな、きつと異世界か1世ではなくヒドルフだからか。

「自衛隊：日本軍基地まで、頼む」

タクシー運転手に行き先を告げる。

自衛隊は俺が派遣される2ヶ月前に改称された。

経緯なんかは覚えていない。その頃は自分が派遣されることを知って訓練ばかりしていた。朝起きて訓練して朝食を摂って訓練して夕食摂って訓練して風呂入って寝る。そんな生活を送っていた。苦しくはなかった。ただ死ぬのが怖くて必死に訓練をしていた。お



かげで生きている。

「着きました」

「ありがとうございます」

代金を払ってタクシーを降りる。額が一桁可笑しかったが、払えたので無視する。こんなところで問題を起こすわけにはいかない。

基地の警備兵に通行証を見せ中に入る。そのまま上官の部屋に行き、紅海の奇跡の時期を探る。

「おつ、ロイ!!お前もう帰ってきたのか」

「はっ!!休む暇など無いと思い、抜け出して参りました」

「馬鹿、それで次の作戦でぶっ倒れたら元も子もねえだろ」

直属の上官である大石大尉が日本酒を紙コップに注ぐ。

「退院：抜け出し祝いだ、飲め」

差し出された紙コップを受け取り、飲む。

「悪いな、紙コップで。生憎ガラスのコップは運搬中に割れちゃった」

「いえ…この地で日本酒を飲めるだけでも幸せです。ですがどうやって日本酒を持って来たんですか?同じガラスなのに」

「ふっふっふ、大切なもんだから懐にしまってたのさ」

大尉は酔いが回ってきたらしいので、本題に入る。

「大尉、なにか面白い噂話とかありませんか?例えば軍艦が全部沈んだとか」

「いやあ、ないなあ。だが次の攻略の標的だった敵さんの航空基地が一晩で消滅したらしいぞ。司令官殿やエアコン組は大騒ぎしてたな」

「へえ、ありがとうございます」

…直前じゃね?確か作品じゃあ軍艦や航空機が蒸発した後、捕虜から深海棲艦の存在が仄めかされていた。もしかしてその捕虜、その航空基地の所属だったんじゃない?。

「ありがとうございます、大尉。今日はもう寝ます」

「おう、しっかり休めよ」

自分の部屋に戻り、布団に潜る。

紅海の奇跡はいつだ?明日か?明後日か?明々後日か?

もう目前にまで迫っている。艦これのゲームでは深海棲艦の対地

攻撃力は航空基地の襲撃以外なかった。だが今は違う。戦艦や重巡の艦砲射撃の威力は？長門型並？大和型並？

寒くはないのに震える。隣は同期の青松だからいいが、恐怖で叫びたくなる。

覚悟だ、覚悟がいる。このままじゃ当日に生き残れない。

取り敢えずは休むため、自分で自分を気絶させる。目覚めりや腹も括れるだろ。

起床ラツパで目覚める。

点呼の前までに布団を畳んで、着替え等を済ます。

「大石小隊、ロイ・ヴィツフェ・ヒドルフ軍曹、青松伊智雄一等兵、全員います」

朝食を食べる。

アラビア半島の先つちよだがシーレーンが確保されているからか美味しい飯が食える。

「大石小隊は朝食の後司令室に集合せよ。繰り返す大石小隊は…」

「大石小隊はハーミル島に行ってくれ。昨日から連絡が取れていないから、敵に占領された可能性がある。もし占領されていたら指揮所と観測所を爆破して戻ってきてくれ」

「ボートを用意した。水と食料もだ。万一占領されていたら、ヘリは目立ちすぎる。遅いが見つかりにくいボートの方がいいだろう」

「了解、出撃準備に取り掛かります」

司令室を出て、準備をする。おそらく深海棲艦を相手にするだろうから、グレネードは閃光以外なしだ。銃も一発でも多く当てられるよう機関銃。後はハーミル島にあるものでどうにかする。これ以上は持っていけない。

「大尉、準備出来ました!!」

「よし、大石小隊、出撃!!」

道中は思いの外静かだった。波も穏やかで雲一つない青空。水上

艦も見当たらない。

「ハーミル島を目視で確認。上陸準備」

「了解、上陸準備!!」

ボートを操縦して島の砂浜に漂着させる。そして降りたらボートを出来るだけ陸に寄せる。帰りの船がなくなったら一大事だ。

ボートを寄せた後、姿を隠すため森の中に入る。

「全員、予定通り散開していくぞ。俺と一等兵は指揮所。軍曹は観測所を制圧する。付いてこい青松!!」

「はい!!軍曹、後でまた会いましょう」

「おう、じゃあな」

そうして二人は海側の指揮所に行った。

振り返り、森の中を進む。

観測所はこの森の奥にある山の頂上近くだ。巡回がないかを耳と感覚を頼りに確認しながら足を速める。まだ深海棲艦は見えてないが来られると面倒だ。

「…いた」

前の方から足音。音からして二人、どちらも軽いがしつかりとしている。この島はスエズ戦争の影響で住民は全員大陸の方に避難した。つまりは敵。足音を殺しながら走り、見えた瞬間に刀を抜く。

「!!」

「死ね」

小銃を持った男を左胸から右脇腹にかけて斬る。そして走りの勢いを活かした蹴りをもう一人の男の股にお見舞いする。

「||||!!」

すまねえ、叫び声はさっぱりなんだ。

叫ぶ口に拳銃を突き付ける。

「英語喋れるか?」

「なんだよ、なんだよ、このクソ野郎!!」

「謎の生物兵器を見たか?」

尋問。昨晚の噂を確かめたい。

『ああ、見たよ!!あいつら陽が沈んだ頃に現れやがった。銃も爆弾も

効きやしない。よくあんなの作ってくれたな、おかげでアルネアが!!』

『御苦勞』

興奮する男の頭を殴って気絶させる。間違いない、深海棲艦だ。

この島も紅海にある以上、腹を括るしかない。

「大尉、聞こえますか？大尉？」

無線で大尉を呼ぶが、反応がない。あるのはザアザアというノイズだけだ。

：上を見る。木の葉が幾重にも重なりあい太陽の光が見えない。引き返しても指揮所の位置が分からない以上、ここは当初の予定通り観測所に行く。

走る。自分が出す音を気にせず観測所目掛け走る。

「goaejggn!!」

現地語だろうか、兎に角俺を指差して叫んでいる。ナイフを投げてそのまま走り去る。今は時間が一番大切だ。

見晴らしのよい頂上近くのプレハブ小屋：観測所の扉を蹴破つて中に入る。そこには二人銃を持った奴がいたがどちらも斬り捨てる。

任務を果たすため爆弾を設置したら、大尉に連絡する。

「大尉、大尉、聞こえますか!!」

しばしの沈黙。そして応答。

「こちら大石、どうしたロイ？」

「大尉、爆弾設置しました。そっちはどうです」

「こつちも終わった。これから合流地点に向かう」

「分かりました。それから、昨晚の噂話、裏が取れました。事実です」

「なんだと!!：取り敢えず、合流地点に來い。出来るだけ早くな」

「はい、では合流地点で」

無線を切り、窓に足をかける。

これが最速だ。だから覚悟を決めろ。

「やああああ!!」

窓から飛び、近くの木に飛び移る。そしたら麓側に移動して、また木に飛び移る。

これを繰り返していると、海が光る。

「砲撃!!やばい!!」

衝撃波で木が揺れる。おそらく戦艦級だ。

着弾場所はボートを停めた砂浜近く…合流地点!!

「大尉、大丈夫ですか!!大尉、大尉!!」

「ぐう…ロイ、無事か…」

明らかに負傷している声。重傷なのだろうか、怠そうに喋る。

「青柳は…無事だ。二人で脱出しろ」

「いやです!!おい青柳、聞こえるか、青柳!!」

怒鳴りつけるが、全く返事はない。

「青柳の奴は港に火放ってるから無事だよ。…だから急いでくれ」

「…ありがとうございます、大尉」

「おう、靖国でな」

無線を切る。それから何度か砲撃音が響くが気にせず山を下り合流地点に行く。

そこには青柳がいた。

「軍曹、大尉が…」

「分かっている、急いで出るぞ」

ボートを海に押し出し、エンジンを吹かす。

尾行なんか気にせず直線で基地を指す。

「軍曹、9時の方向になります!!」

「なんだと」

青柳の叫んだ方向を見る。人だ、人が立っている。健康的とはお世辞にも言えない青白い顔で、上はセーラー服、下は水着のやべー奴。ル級がこつちを見てほほ笑んだと思ったら、砲身が光る。

「伏せろ!!」

「えっ」

青柳の右胸が消える。爆発しなかったから徹甲弾を使ったのか。舐められてる。

「軍曹…先に…大尉の所に…靖国で待ってます」

「悪いがまだ後100年は生きていたいんだ、待たずに先逝っててく

れ」

「フフツ…うっ!!」

青柳が冷たく、動かなくなる。軍学校で仲間の死を悲しみ過ぎてはいけないと習った。しかし活用はできない。怒りで機関銃を持つ手が震える。

ル級の顔がより一層笑っているように見える。

「ふざけんな、ぶっ殺してやる!!」

ル級の方にボートを向け、機関銃を連射しつつ近付く。

「地獄に落ちろや!!」

機関銃の連射を受けてはいるが、ル級は避けない。寧ろ声を出して笑っている。

だが飽きたのか、砲身が一直線にこつちを見てくる。

あつ…ふーん（諦め）

肉体は覚醒したけど覚悟が決まっていなかったのでそっとしておいてください。

ル級から送られてきた砲弾が迫る。ゆっくり、ゆっくりと。

走馬灯は流れていないが、時間がとてもゆっくり流れているように感じる。現に波飛沫の白が海面の青に叩きつけられ消えていくのをこの目で捉えているし、青柳の死体の力の抜けた腕が落ちていくのも見れる。

まだ死にたくないが、もう死ぬのは確定しているようなもの。せめてもと青柳の口元の血を拭こうと思う。

本編開始前に死ぬのか、何だか安心していている自分がいるが、悔しい自分もいる。この世界は艦これの世界。つまりもうすぐ艦娘と会える。なのに俺は直前で死のうとしている。

砲弾が着弾するまでまだ距離がある。

ポケットのハンカチを出し、青柳の口許に運んだところで異変に気付く。

青柳の腕はまだ落ちている途中だが俺の手は既に口許の血を拭いている。移動距離的に腕が落ちる方が先のはずなのに。

試しに立ったり座ったりを繰り返す。5回繰り返してもまだまだ砲弾は距離がある。

「もしかして……これって覚醒ってやつ？」

書いている時は単純な基礎能力が高いだけだと思ってたけど、本人はこんな感じで時間がゆっくり流れているように感じていたのか？そしてこの時間がゆっくり流れる……リフレックス状態を覚醒と仮定するのなら、あのスーパーパワーも手に入っているのか？

「どうせ、どうせやらなくても死ぬんだ、なら試してやる」

砲弾が至近距離、それこそ手が届くまで近付いた時、腕で砲弾を弾く。アニメの金剛を想像しながら。

砲弾を弾いた瞬間、リフレックスが解除される。

そんな

ル級の口が動いてそう言ったように見えた。  
弾かれた徹甲弾はル級の頬を掠めて何処かに消える。

波の音が場を支配する。俺も、ル級も、どちらも動かない。ただ波に揺られるだけだった。

ル級が咆えるまでは。

「ウルオオオオオ!!」

「!!」

ル級の背中から炎が現れる。初めは自沈か事故かと思ったが、その炎はやがて黄色くなり、変な風を吹かせ始める。

フラッグシップってああいう風に誕生するんだ。

そんなことを思っていたら、ル級は一步を踏み出す。黄色の炎：オーラも消える。

ガラント

砲弾を装填した音だろうか、そんな重い音が聞こえる。ル級はまた砲を微調整し、直撃ではなく至近弾を出せるようにする。

まずい、直撃ならさつきみたいに弾けるが、至近弾：それも爆発するような奴だったらボートは転覆するだろう。そうなったら青柳を遺族に渡せない。

注意を惹こうにも、移動手段は青柳の乗ったボートだけ。これでは今と変わらない。いや、もう一つある。覚醒がこの体に流れているものをしっかりと目覚めさせてくれているのならば。

ル級の砲から発光。リフレックスモードとなり、時間がゆっくり流れる。青柳を守るため、機関銃で砲弾を撃ち落とすしたらボートを大きく蹴り、そのまま海面に着水する。

希望通り、覚醒によって目覚めた遺伝子が、俺を海に浮かせてくれる。

母親の遺伝子：本編の言葉を使うなら、親衛隊と近衛隊女王を護衛する部隊。深海棲艦の民が知っている軍組織の中では近衛隊がトップの実力を持っており、時に女王の政治に助言を行う。親衛隊とは任



務の性質が対極のため、仮にかなりの実力があっても近衛隊と親衛隊の両方には本来はなれない。の隊長を兼任した伝説の深海棲艦の遺伝子が、俺を深海棲艦と同じようにさせてくれている。

「終わりだ」

電探に引つ掛からないよう、限界まで姿勢を低くする。そうしたら近付きながら閃光手榴弾を投げ、銃で撃つことで空中で爆発させる。ル級の目を潰せたのか、機銃や副砲による対空射撃は見当違いの方向を撃つ。

「靖国で休んでる二人の分だ、受け取れ」

重い筈の機関銃は、片手であっさりと扱えるほど軽く、そのトリガーを引くのも、同じだった。

燃料切れのボートを引つ張ってアデンに戻る道中で、俺は彼女達：艦娘を見つけた。大和、鳳翔、夕張、曙、吹雪の五人だ。

「あなたも…」

「初めまして、大和さん…私はロイ」

「ロイ…そう、あなたが…」

如何やら、紅海の奇跡はもう終わったようだ。

アデン発、横須賀着の飛行機は、俺と艦娘五人、そして青柳の遺体と大尉の形見の酒瓶を乗せて空を飛んでいた。

如何やら五人はスエズ運河付近に上陸した後、徒歩で紅海沿岸まで移動し、インド洋を目指して航行していたようだ。詳しい理由は教えられなかったが、大方深海棲艦の都市があったり、危険な地中海を脱したかったのだろう。

俺は司令官殿にことの顛末を報告した後、陸戦隊である大石小隊の派遣を決定した元帥直々に帰還命令が出され、アデン司令官最後の命令である日本までの五人の護衛を全うする為、こうして同じ飛行機に乗っている。

対深海棲艦の切り札である艦娘を早期に確保。そして秘密裏に出された撤収準備。元帥はスエズ戦争というフェーズを終わらせ、深海

棲艦との戦争というステップに移ろうとしている。今の段階で、もう元帥は親衛隊なのだろう。

一方で俺は、かつては画面越しにしか見ることでできなかった艦娘という存在と話し合うのでもなく、寝るのでもなく、ただ青柳の入った棺の前で、大尉の形見の酒を飲んでいた。棺は大きいので、後ろの隅っこに置いてある。艦娘たちとは対角線上の位置にあり、遠い。

ロイ1世としては、青柳一等兵というのは今日知ったばかりの人間であり、それは大石大尉も同じだ。しかしロイ・ヴィツフェ・ヒドルフとしては？青柳は年が一つ違うだけの同期だ。大石も一期先輩なだけで、訓練学校では同じ隊だったこともあり、今回のアデン派遣で同じ隊だったのがとても嬉しかった。

この微妙な違いが、言い表すことのできない気持ち悪さとなり、近くにあった大尉の酒を飲むことしかで紛らわらせることが出来なかった。

保育園での組み分けは？小学校のクラスは？中学3年のときは何組だった？高校生に：訓練生になって初めて買ったものは？

目前まで迫った深海棲艦の脅威が消えたことで、一気に考え出す。俺はロイだ。どっちのロイだ？普通の人間として生き、そしてネット小説を書いたロイか？それとも艦これ二次創作作品の主人公のロイか？

酒をラツパ飲みする。痛い、頭が痛い。

戦友の死がここまで重いとは思っていなかった。今日の朝：出撃前まで、PTSDになるから取り敢えず休めるとしか思っていなかった。浅はかだった。このままじゃ本当にダメになる。

「あんた、大丈夫なの？顔色悪いわよ」

リン、という鈴の音。そして紫の髪色に吊り上がった目。

曙だ。手には水の入ったコップを持っている。

「鳳翔さんが、これ：飲みなっ」

コップをもらう。水面に映っているのは銀髪の顔色が悪い男だ。

「中の人、あんたの大切な戦友だったの？」

気持ちを酒以外で紛らわせるためか、棺に手を当てて聞いてくる。

「分からない。大切といえばそうなのだが、昨日初めて知ったといえばそれも正しい」

「あの基地で知り合ったの？」

「いや、何年も前だ。訓練学校の外周を何度も走らされていて、そこにこいつはおからを持ってきやがった。母の手作りです、おいしいですよ、こっちは水が欲しいってのに」

ヒドルフの記憶が蘇る。だが同時に1世の意識がそれを揺さぶる。

「だが、俺がこいつを知ったのは昨日だ。病院を抜け出して部屋に戻ったとき、こいつは俺の机で手紙を書いてやがった。見つかったときは、お早いお戻り、流石です、だ」

「あんた…もしかして…」

「多分、曙想像通りだ。二重人格に近いもの、俺はロイだがこの体の口イじゃない」

酔いが治まったからか喋ったからか、頬に熱い物を感じ始める。

「…私も似ているわ。曙って名乗ってるけど、本名じゃない。私もあなたと同じ」

「えっ…」

「本名は教えないけど、あたしたち仲間よ」

背中を優しく叩かれる。その度に涙がたくさん流れる。

「曙、曙!!」

二十歳手前の男が少女に宥められていると突然客観的な事実が浮かぶが、そんなことは気にせず、ただこの少女に宥められていた。

「…」

一体の妖精に見られているとは知らずに。

## 未来に向けて全速漸進

艦娘5人を日本まで護衛した後、俺はPTSDの可能性大として軍病院にて検査、見事確認され、自宅療養をしていた。

家には誰もいない。久しぶりに帰ってきたとしても、父親代わりの元帥は常に大本営にいる。幼いときからそうだったから、それを悲しいとは思わない。寧ろ応援している。元帥はこれからの深海戦争で国防と親衛隊という二つの役割を果たさなければならぬからだ。

深海棲艦については昨日、俺が遭遇してから1カ月後に発表があった。エジプトがその姿を撮影することに成功したため、戦場の幻覚や噂話を脱せた。

また、艦娘についても政府広報のマスコットから戦場に赴くことができるようになった。艦娘5人と技術者によって艦娘を建造できるようにになったのは一週間前だ。

そして、提督探しも始まっている。妖精が見えなければならぬのでそれまでいた軍司令官から検査が始まった。一定数はいたものの、今後建造される艦娘の数を考えると少なく、政府関係者↓公務員↓民間人といった風に検査は拡大していった。

俺も一応は検査を受けるはずだったが、PTSDで正しい結果か判断付け難いことから免除された。

「行くか」

汚かった家の掃除を済ませたので、行きたかった場所に行く。

服装は軍服だ。酒瓶と花束を車の後部座席に置き、車を走らせる。

多くの建物と街路樹を抜けて、駐車場に車を止める。

桜はまだ咲いていない。だが道行く人は多い。

酒瓶を手に持ったら、俺もその人々に混じって歩く。

「待たせたな、大尉、青柳」

靖国神社の参拝を済ませたら神主さんに酒瓶を渡して再び車に乗る。向かう先は青柳の墓だ。

葬儀には検査や報告が重なり参加できなかった。それは喪主も理解してくれたようで、手紙で墓参りはしてほしいと伝えてくれた。

青柳も、その遺族も幸せだったのかもしれない。幸せと言っても不幸中の幸いだが……。深海棲艦によつてシーレーンが破壊され、火葬するのに必要な燃料の高騰と沿岸部の襲撃による犠牲者によつて簡易の埋葬は兎も角、火葬することも葬式を開くことも難しくなった今、青柳の葬儀ができたのは奇跡にも近かった。

青柳の墓石は最近一般化している粗い加工のものではなく、派遣前の綺麗なものだった。

「……すまなかった」

ここ最近、青柳の最期を何度も夢に見ている。夢を見るたびに思う事が覚醒がもう少し早かったら、という言い訳から覚醒に気付くのが遅くてすまなかったという謝罪の念に代わるのかかる時間は長くなかった。

青柳は同室だったこともあり、仲が良かった。傷がすぐに治るこの体質のことも気持ち悪いとか不気味とか言うのではなく、純粹に羨ましいと言ったことも大きかったと思う。そんな奴が今の俺を見たらどう思うのか。

「笑うか？怒るか？悲しむか？」

返事はない。答えてくれる奴は既に目の前の墓に入っている。

そして一番の問題は俺が変わることができないところだ。

PTSDなので提督適性検査が受けられない、陸戦隊に関しても元帥が艦娘用の予算確保のために解隊した。陸軍も同じで、対深海棲艦で団結した軍は予算のため陸軍の9割を予備役に編入……除隊させた。残り1割は対外国の特殊作戦群で、入るのは難しい。空軍に入ろうにもヘリ以外碌に動かせないので無理。

現状、俺はPTSDが完治したと判断されるまでどうしようもない。

そう思いながら墓地を後にして、車に戻ろうとすると、黒服が俺を囲む。

「何者だ」

返事はない。だが全員が手を前で組む……いつでも銃を出して撃てるような態勢を取っており、素通りさせてくれそうにないのは分か

る。

「何をしに来た、ここは眠る場所だぞ」

また返事はもらえない。仕方がないので強行突破しようかと考え、その場で少し跳ねる。

誰かが銃口を向けたのか、リフレックスモードに入る。

「うおりゃあ!!」

全速力で目の前の男にタックルをし、ゆっくりと倒れる男の足を掴む。そうしたら回転し、固まっているところに投げる。投げた男が固まっていた男にぶつかることが確信出来たら、バク宙で反対側にいた男の頭を足で挟み、もう一回バク宙したらそのまま地面に叩き付ける。

後二人。

肘を一人の男の顔にめり込ませるほど強く打ち付けたら、最後の一人にラツシュを叩き込む。

「ウリヤリヤリヤリヤリヤ、ウリヤー!!」

最後の一発を受けると男は空を飛び、墓地の敷地の外に落ちた。

「はあ、はあ……ここは静かに過ぐす場所なんだ、馬鹿どもが」

息を整え、車に戻ろうとした時、奥から一人の老人が出てくる。胸には勲章をびっしりと付け、自分が有能であることを示す。階級章から、元帥であることが分かる。

「身構えなくていいぞ、わしは陸軍で元帥をやっている、鷹宮 龍造だ。さつきは手荒な真似をしてすまなかった」

「いきなり出てきてはい謝罪は命乞いをしているようにも見えないぞ」

「山吹の奴が自慢するおぬしの實力を見たかっただけじゃ」

黒服連中はまだ起きていない。つまるところ鷹宮元帥の護衛はいない。それなのにこんな悠々と話しているのは相当の實力者か敵意がないだけ。

「おぬしの實力を買って頼みたいことがある。やってくれるか」

「内容による」

「簡単じゃよ、近々提督一期生：軍出身の提督たちが一斉に着任するにあたって、鎮守府の守備隊を陸海共同で編成する。おぬしはPTS

Dじゃが実力も精神も問題無いと見る。じゃからおぬしも参加しろ、守備隊に」

守備隊：憲兵隊の前身か？だが物語としては帰国後、ロイは提督訓練学校に進んでいる。憲兵隊ルートはない。

「断る、俺は提督志望だ」

「問題ない、わしがおぬしを提督訓練学校に編入させるよう推薦する。：適性があればの話だが」

「なら受け入れる。俺だって燻っていたくない」

「交渉成立じゃな。明日の昼、大本営に來い」

それだけ言うと、陸軍元帥は去っていった。

次の日の昼、俺は陸軍元帥に言われた通り大本営に行った。警備員がこちらをちらつと見たが、通つて良しと一言告げたことから、昨日の出来事は幻覚じゃなかったと改めて分かる。

陸軍元帥の部屋は応接机とそれを挟んで向かい合う椅子。そして執務机とそのため椅子という必要なものだけを集めた部屋だった。

「昨日振りじゃね、ロイ君」

「それで、本日はどのような御用件で？」

「挨拶ぐらいいいじゃろうに：」

そう言うと陸軍元帥は応接椅子に座り、俺にも座るよう手で勧める。甘えて俺も座り、改めて陸軍元帥と向き合う。

「まずロイ君の守備隊での扱いじゃが、必要に応じて出動してもらおう。装備は訓練学校の方に回しておくから安心せい。これが階級章と証明証じゃ」

渡されたのは中佐の階級章と桜の花の上にカモメが描かれたバッチだった。

「大石小隊で唯一生き残ったのとスターターファイブスを日本まで護衛したことを考えて、中佐にした。それと適性検査の方じゃが、一階で行つとる。この指示書を持ってけ」

「ありがとうございます、閣下」

「幸運を祈るわい」

立ち上がり、一階の検査場で適性検査を受ける。結果は言うまでもなく、合格だった。



お邪魔するよ、悪いけど

黒塗りの高級車——に見せかけたそこら辺の安い車を改造したものの——の列が高速道路から一般道に下りる。その中には鎮守府守備隊から憲兵隊に名を変えたばかりの者達が海沿いの大きな建物を見つめていた。

提督適性検査を難なく突破し提督学校に転入した俺は、いつものように様々な戦術を頭に叩き込んでいく。覚えるのは元から苦ではないので大変ではないが、数日後にその戦術が実際には役に立たないことが分かり、忘れなければならぬのが辛い。

陸戦隊を志望していたからか筋トレなどは免除されており、その時間を使ってリフレックスモードの発動を任意で出来ないか試してみたり、妖精を探していた。

妖精ならあちこちにいるのではないか、という指摘は正しいが、俺が探しているのは建造のときに出てくる妖精でも、羅針盤を回すあくm：妖精でも、土下座妖精でもない。本編では「相棒妖精」や「ジョニー（命名ロイ）」と呼ばれていた、すーぱーすよーせーさんだ。

その妖精がいればどれくらいの防護力かははつきりと分からないが防弾コートや武器類、乗り物を開発することができるようになる。それらが手に入れば生存率や殲滅力が上がり、移動時間の短縮に覗き、更には物語の結末を変えることができると信じている。

本編ならPTSD検査のときに接触するはずなのだが、今までずっと見てない。だから探しているのだが、妖精や同期に聞き込みをしても、あちこち探しまわっても、なにもありません、痕跡は0です。

一方で守備隊：じゃねえわ、憲兵隊としても度々出動している。主な内容は校内に入ってきた不審者の撃退や脱柵した連中の搜索と原因の聞き込み。稀に鎮守府内でのいざこざの仲裁と平和そのものだ。

しかし專業憲兵の方から、野心が強かったり金儲けしか考えていない連中が山吹元帥が直々に制定した規定を違反した出撃・遠征をした

り艦娘を売買していると聞いた。

前者は単純に指揮に不慣れな民間出の促成提督か、戦果を重視する提督に別れるらしい。後者は艦娘を秘密裏に建造し出撃させる、書類上は存在しないのでまともな補給・入渠が受けられず沈む艦娘が多いと聞く。だから調査はするが軽い監査で済ませるか制圧するかを見極めるのが必要で、民間出なら出撃数のわりに撃破数が少なく、逆に戦果重視なら出撃数のわりに撃破数が多いらしい。——戦果重視だと秘密裏に建造された艦娘の戦果を他の艦娘に入れる為、出撃制限数を守ると戦果が一般的なものより多くなるらしい——。

一番問題なのは艦娘を売買している方だ。

艦娘を解体、轟沈、誘拐等々されたようにみせかけて売却。ブラツクマーケットにて販売。

これらは法で裁けないらしい。

鎮守府側が売却する過程で、除籍されたり誘拐されて行方が掴めなくなった場合は軍法違反にならないので処罰できない。ブラツクマーケットでの販売も艦娘が人か道具かで国会が揉めているので法整備が進まず、罰することが出来ない。

だから憲兵隊も鎮守府側をいちゃもん付けて左遷することしかできない。運よくブラツクマーケットに辿り着けたとしても人身売買ではないので艦装をつけている状態じゃなければ何もできない。

そんな無法地帯に軽くなりかけているのが日本の現状である。

両元帥が必死になって動いているが、誰かの不幸で自分が幸せになる奴は圧倒的に多く、法整備を要請すれば軍の政治介入と騒がれ、大物更送しようとするれば軍内部での大粛清とマスコミが口を揃えて言う。

：はつきり言うわ。提督学校辞めて裏世界に飛び込んで色々潰したい。

だが本編の進行を遅らせるわけにはいかなないので辞めることもできず、今日も今日とて簡単な出動命令を受ける

と、思っていた。

「中佐、出動です、中佐ア!!」

「なんだ、騒がしい」

部下であり年上の專業憲兵が埠頭で海を見ていたところに駆け込んでくる。出動と言っているから走るだろうが、今回はいつもよりうるさかった。

「そりやうるさくもなりますよ。艦娘を売買していた二世（ふたよ）がとうとう尻尾を出しました」

なるほど。二世というのは憲兵隊ではかなり有名な提督だ。

無能で馬鹿で金に目がなく倫理観がゆるゆるという時点で既にヘイトは高いのに、イケメンという要素が加わることで更に高くなった。

左遷しようにも親が現職政治家で背後の組織の強さから第三者が納得が得られて法に則った行動をしなければどうしようもなかった。だが周りの連中が証拠を揉み消したりするので出動できなかったのだ。

「ツ!!急げ。武装や車の手配は!?!」

「既に校門にて万全の状態で待機しています。というのも今回の出動は元帥が傍受を恐れ人力で届きました」

校門で待機していた黒塗りの改造車に飛び込む勢いで乗り込む。

車内は広く、そこで提督候補生の服から憲兵服に着替える。

「改めて、今回の出動を説明いたします」

「頼む」

着替えながら、ドライバー兼伝令兵の話聞く。

「今回逮捕するのは現職の大物政治家の息子です。写真をご確認ください」

「見た目は1000点、中身は0点だな」

着替え終わったので、銃の最終確認をする。

「仲卸業者への連絡を無線で行い、それが艦娘らによって傍受。近隣の民間人を經由して大本営の峰友少将に渡り、元帥が出動を命じました」

峰友少将は有能・イケメン・優しい・悪い奴らをぶつ殺すの4拍子

揃った元帥の部下だ。

「その民間人つてのはどんな奴なんだ」

「子供です。大本営に駆け込んできたときの映像があるので御覧になりますか?」

「頼む」

少年だ。10にも満たなさそうな少年が片方しかない靴で大本営に走ってこようとし、入り口で止められている。

「少年は憲兵に、艦娘さんから託された、偉い人に渡してくれ、そう泣き叫びながら封筒を掲げていました。その封筒に入っていたのが…」

「無線の傍受内容と出動要請」

「はい。それも書くものがないのか血文字でした」

…

「飛ばせ。スピード違反なんて気にすんな」

「中佐!？」

「残念ながら、鎮守府への突入は一斉に行えと命令されています。まずはサービスエリアで他の憲兵隊と合流します」

「チツ!!」

——  
鎮守府近くで車から降り、指揮官である大佐の元に集まる。

「よし、アルファは俺に付いてこい。ブラボーは艦娘寮の制圧。チャーリーは事前に指示した狙撃ポイントで待機。エコーは鎮守府を封鎖しろ。鼠一匹逃がすな」

「大佐、私はどうすれば」

「中佐は憲兵詰所を制圧しろ。正面から堂々とだ」

「OK!!」

「執務室で集合だ、行くぞ」

命令を受けた全員が見つからないよう屈んで移動する。

俺は命令通り正門から堂々と入る。しかし入り口には二人の歩哨。

「おい、お前なにをしているんだ」

「止まれ、ここは軍関係者以外立ち入り禁止だ」

近付いてくる一人の男。俺はそいつの頭を鷲掴みにし、もう片方の

歩哨に投げつける。

重なる二人の体に発砲。二人はすこし跳ね、動かなくなる。

正門から中に入ったところで空に照明弾を撃つ。照明弾の光が辺りを真昼のように照らす。

「夜戦はお好き!?!」

少し高い、とあるエイリアンの声を彷彿とさせる声で叫んだら、憲兵詰所に歩き出す。

「動くな!!」

前方から10人位のこの鎮守府所属の憲兵が銃を構える。

「大本営からの命令だ。こここの提督を逮捕する。巻き込まれたくなければ引っ込んでろ」

「そいつは出来ないねえ、俺たちやあの坊ちやまのおかげで甘い汁吸えてんだ。手放すかよ」

丸眼鏡を肥満の男が拳銃を構え声高々という。

「じゃあさ……とつととくたばれ」

軽機関銃を片手で一丁ずつ持ち、弾をばら撒くように右から左へ撃つ。

憲兵隊は身を隠していなかったので、何度も銃身が往復すれば全員が倒れた。

詰所に着く。あれほど派手にやったからか、中から大きな音はしない。だが、なにか艦娘売買に繋がるものがないかを調べるため、扉を蹴破って中に入る。

「ウウウ……」

幽かな呻き声。それも女の。

「どこだ!!返事をしろ!!」

一階を見る。誰もいないしなにもない。二階を見る。やはり誰もいないし何も無い。

「まさか……隠し扉か!?!」

この詰所に三階はない。つまり一、二階のどちらかにいる。だが全ての部屋は調べ尽くした。もう隠し扉とかそういう系しかない。

カーペットを全て捲る。なにもない。

新しく張り替えられた壁紙がないか調べる。どれも単に傷を隠すために張り替えられている。

本棚を倒して、裏に扉がないか調べる。詰所に立派な本棚は無い。あるのはプラスチックケースだけだ。

クローゼット、押入、床下。全てを調べるが、やはりいない。

「クソツ!!頼む、返事をしてくれ!!」

強攻策に出るか悩んでいたところ、妖精が一体、部屋の外に飛んでいく。いつからいたのかは分からない。だが付いてこいと言つてる様な気がした。

信じて付いていくと、妖精は階段近くのコンクリートを指差す。

「この先か!?ありがとう!!」

とても小さな鍵穴があったが持っていないので、破壊する。返ってくるダメージは考えず、全力で拳を振り下ろす。左手に変える前に終わったので、早かったのだろう。コンクリに大きなひびが入る。そこに指を入れ、コンクリを取り出し外に投げる。

中は階段が続いていた。しかし照明がなく、とても暗い。正しく一寸先は闇である。

銃についているフラッシュライトの光とわずかな音を頼りに進む。

聞こえてくるのは呻き声と水の音。階段はまだ続く。

ようやく階段が終わったと思ったら、今度は直線。伏兵に気を付けながら全力で走る。

「行き止まり!?一本道だったぞ!!」

壁に手を当てて、何か仕掛けがないか探るがなにもない。本当にここが行き止まりだ。

「声は近い、下…上か?」

銃を天井に向け、見る。

「おい…おい…嘘だろこれは!!」

天井には全裸の女。体の大きさから駆逐艦。顔からして…

「白露型駆逐艦一番艦、白露だな。助けに来た」

体全体に打ち付けられた釘を抜き、天井から降ろす。

焦点が定まっていない。体温もかなり低い。取り敢えず着ていた

服を着せ、地上に出る。

「こちらロイ、艦娘を救出。けがが酷く意識が朦朧としている、すぐの入渠が必要だ。繰り返す、艦娘を救出。入渠が必要だ!!」

「こちらアルファ、付近に鎮守府がない。撤収まで持ちそうか」

「無理だ!!体温がかなり低い。今から大本営に連れて帰っても間に合わない!!」

「そうか・・・なら、この鎮守府の入渠ドックを使用しろ。付近を通つたが、利用できるはずだ」

「了解、直ちに入渠ドックに向う」

自分の腕の中で消えそうな命を守るため、俺は知らない鎮守府を走った。

妖精が道案内をしなければ、俺はきつと迷子になって白露を殺していただろう・・・。

「ついた・・・ここが入渠ドック」

少し入るのに抵抗してしまうが、命を守るためと心に言い聞かせ、中に入る。

「なんて・・・醜い：場所、なんだ・・・」

開ける、死刑だ!! (任務を無視した私刑)

脱衣所は異臭…血の臭いが充満していた。病院に連れて行きたくなったが、艦娘を治すには入渠が最適解なので諦めて意を決し、中に入る。

…、予想通り、湯船は黒くて赤い。排水口になんか詰まっている。使えそうなシャワーが一個しかないという整備・衛生のどちらから見ても地獄な場所だった。

時間がないので体を洗うのは諦める。しかし綺麗な湯船に浸からせたいので、水を抜き、浴槽を洗う。綺麗になったと思ったら、白露を抱えて中に入り、お湯を入れる。

「頼む、助かってくれ」

湯が白露の体を包む。しかし傷は治らない。

「入渠ドックが整備不足だったから入渠の効果が薄まっている？それとも修復材が必要？妖精!!高速修復材を持ってきてくれ、頼む!!」

近くにいるはずの案内してくれた妖精にむけて叫ぶ。工廠か補給か羅針盤かは分からないが白露の場所を知っていたんだ。バケツの場所も知っているだろう。

「こつちだ!!早く!!」

道案内の妖精がバケツを一つ持ってきてくれた。

詳しい使い方は分からないが、某公式認定解体艦娘のMVを思い出し、湯船にドヴァーする。

「う…」

「しっかりしろ!!おい!!」

「…」

「おい!!…なんだ、眠っているだけか」

傷も塞がっている。体温は湯船に浸かっているので当てにならないが、顔色が良くなっている。

「妖精、彼女を頼んだぞ」

上着を籠に入れたら、執務室に向う。



道中は平穩そのものだった…この鎮守府所属の憲兵の死体があることを除けば。

他の隊が既についている。クリアニングをする必要がないので階段を7弾飛ばしで上る。どの階にも憲兵の死体が転がっており、その多くが警棒を握っているのも、真面目な武器を持っていなかったのだろう。道理で仲間の憲兵の死体がないわけだ。

執務室前の廊下から、申し訳程度の銃声が聞こえてきた。階段の後ろの方に、指揮者である大佐がいた。

「遅かったな中佐」

「申し訳ありません、状況の方はどうなっていますか？」

「執務室にいた憲兵隊が報告を受けて机やソファーを使った簡易のバリケードを設置。それに身を隠して執務室にあつたハンドガンを使つて抵抗している」

「二世は？」

「まだ執務室のはずだ。封鎖中の部隊から連絡はない」

廊下の方を見る。憲兵3人が時折こつちを見て撃つてくる。

「大佐、時間をかけたくありません。呐喊します」

「そうか…行つてこい、中佐!!」

廊下にナイフ一本で出る。憲兵がこつちを見て銃を構えた瞬間、世界が遅くなる…リフレックスモードが発動する。

飛んでくる遅い銃弾を避け、バリケードを乗り越えたら3人の喉を搔っ切る。世界が元の速さに戻る。

「流星は中佐だ…突入するぞ、盾持ちは前に!!」

機動隊員の盾を持った二人が先頭に立ち、扉を蹴破つて中に入る。それに続くように俺達も中に入る。

「…いない？」

「本部に連絡して無線を残らず傍受させろ!!」

「何が始まるんです」

「裏社会との戦争だ」

受話器が戻されていない電話を見る。番号からして警察署だ。

「賄賂を貰つてる汚職警官が来るぞ!!隠し通路を探せ!!」

「大佐、下の階から艦娘が!!」

「ブラボー!!なぜ寮の封鎖をしなかった!!」

「しています、おそらく、別の場所にいた艦娘かと…」

あつ、白露か。回復したんだ。

「ぜえぜえ…あいつは逃げた…艦娘売買のための裏道を使って…」

「…隠し扉がどこか教えてくれ、頼む」

大佐が頭を下げて白露に願う。白露はなにも言わず、勲章を飾っている棚を倒す。そこにはエレベーターの扉があった。

「地下に繋がってる…その先は分からない」

「ありがとうございます、お前ら、行くぞ!!」

「待ってください、大佐。チャーリーより連絡。警察とヤクザの車両が計30台、こちらに接近中とのことです」

「賄賂組め…チャーリーと中佐を除く全部隊は鎮守府内にて防衛戦を行う。ここの武器庫から弾、銃、手榴弾、あるだけ持って入口に集まれ。チャーリーは防衛網を突破した敵を狙撃。中佐は二世を追え!!」

「二「了解!!」」

地下道はコンクリで整備され、一本道だったこともあり、速度を出して走ることができた。二世はだいぶ先にいるようで、足音の反響すら聞こえなかった。

先には扉があった。見るからにして頑丈そうな作りである。

「鍵穴はなし。電子ロックか…。それもカードキー…」

カードキーは二世か売買先の商人しか持っていないだろう。つまるところ取れる手段は一つ。

「はあ…ウリヤリヤリヤリヤ!!」

ぶち壊す。頑丈だとしても拳を叩き込めばいつかは壊れる。

「さつさと…壊れろやあーッ!!」

へこみはするが壊れる気配がない。

「くそ、くそ、くそ!!逃がしてたまるか、逃がしてやるか!!」

脳裏をよぎるのは白露の姿。天井に釘で貼り付け、直接指示したか憲兵隊が勝手にやったのかは知らないが、奴が指揮する鎮守府で起き

たんだ、その責任を取らせる。

「うおらあ!!」

扉はなんの音も出さない。ただそこに鎮座するだけだ。

「うわああああ!!」

奴への怒りからか何もできない悔しさからか、泣きながら拳を叩き込む。

ピッ

「えっ…」

カードキーの差込口を見る。

妖精だ。道案内をしてくれた妖精がカードキーを差し込んでいる。

妖精パワーで用意したであろうカードキー。それを使って扉を開けてくれた。行ってこい、心の耳がその声を捉えた。

「行ってきます」

再びエレベーターに乗り、上にいく。

そこは廃工場のような場所だった。

人の気配、数は7、手にはクロスボウ。こつちを見ている。

背負っていた機関銃で薙ぎ払うように撃つ。例えカバーに入っていたとしても貫通して殺す。

「反撃しろ!!」

自分たちの場所がバレていると分かったのか、クロスボウを使って反撃してくる。しかし所詮はクロスボウ。機関銃に比べたらレートは目くそ鼻くそだし、リフレックスで発射音がなくても避けれる。

「うわああああ!!」

高所に陣取っていた奴が柵を乗り越えて落ちてくる。頭から落ち、首なしの死体になる。

・・・残り一人。

「出てこい、クソ野郎」

外に繋がる扉から、一人の男が入ってくる。

純白の提督服を着た、ルックスのよい男だ。

「盃 二世。お前を軍法違反で逮捕する」

「ふふっ、僕はあの大物政治家、盃 一世（ひとよ）の息子だよ？逮捕

してもすぐに釈放される」

「試してみるか？」

手錠を持って近付く。

8 M・・・7 M・・・6 M・・・5 M圏内に足を踏み入れようとしたとき、リフレックスモードになる。

「まさか、お前!!」

二世だ、二世がリフレックスの原因だ。5 Mあったはずの距離を一瞬で詰めてきやがった。一先ずは離れてなんとかする。危険が去ったので、リフレックスは解除される。

「…避けるなんて、運のいい奴だ。だが続かないよ」

再び歩みを進める二世。距離を保ちつつ、天井に向けて銃を乱射する。

「なにをやっているんだい？僕はここだよ？」

下がりつつも乱射は止めない。

コトン、上からなにか落ちてくる。

「これは…天井を支えてた柱の破片？」

二世はそれをつまみ上げた後、上を見る。

「成程、君の狙いはそれか」

「じゃあな!!」

天井…二世の真上にある天井を支えていた柱を破壊することで、二世の真上だけ崩落する。瓦礫の山に潰されたと予想外の敵の死に安堵しようとしたら、また声がある。

「残念だったね。いい手だと思うけど、僕には効かないね」

砂埃の中から、二世は悠々と歩いて出てくる。

「僕の身体には深海棲艦の血が流れている。そして深海棲艦の遺伝子を持つ者は陸上の覇者である人間の力を凌駕する!!」

再び5 M圏内に近付いた瞬間、リフレックスモードが発動する。二世は目と鼻の先、避ける時間なんてない。

「うおおおお!!」

やられる前にやる、その精神で全力の右ストレートを奴の顔面に叩き込む。

「ふべらッ!!」

「早ければ早いほど、反撃は痛いんだぜ!!」

三回転して倒れる二世。このまま逮捕と思ったとき、眩暈がする。  
「なんだ……これ……」

青柳に煽られて度数の高い酒を未成年なのにイッキしたときと同じ感じた。

「君も……やはり、深海の血が流れる人間……」

「……」

「そして君の能力は危機的状況に陥ったときに超人的な能力を得る」

二世は立ち上がり、俺がなにもできないのをいいことに姿を消す。  
「君の能力はとても強力だ。それも君の能力は僕のと違ってクールタイムがない。だが、それが弱点だ。君の様子を見る限り、連発すれば体力を大きく消耗するみたいだね。そして君は発動を制限できない。なら僕にも勝ち目はある!!」

二世が一頻り喋り終わったところに、漸く動けるようになる。

「くらえ!!」

二世が拾ったクロスボウを使って攻撃してくる。三発目まではリフレックスなしで回避できたが、四発目で発動。来る矢を全部落とした後に解除される。

「君の能力はすごいねえ!!僕の目でも追いつけないよ!!」

矢が飛んできた真反対から、今度は銃声。リフレックスにより回避。

「また膝をつくのは次かな?それともその次?」

何かの機械がこちら側に倒れてくる。避けるのがギリギリ間に合わず、リフレックス。

三回連続でリフレックスが発動したことで、また眩暈が襲う。

「終わりだねえ、憲兵君!!」

二世が正面から近づいてくる。手にはナイフ。あれで殺すつもりだろう。

「だが……」

距離5M、俺は残りの力を使い、灰を燃やす気持ちで前方に渾身の

ラツシユを叩き込む。

「グアッ!!」

「甘かったな」

そのラツシユは突如目の前に瞬間移動してきた二世に全て当たる。二世はその後、何かのタンクにぶつかり、タンクの中に貯めてあった液とともに下に流れてくる。

「お前の能力は5Mを瞬時に移動できる、だ。扉の近くにいたときも瓦礫に巻き込まれなかった後のときも、お前が5M圏内に入った瞬間にリフレックスモードが発動した。それを使ってお前は瓦礫の下敷きになるのを防いだんだ」

「…」

「だがお前の能力は時間で制限されている。一回目に能力を使われた時避けきれたのはその制限によるものだ。制限があることはお前自身が言っている」

君の能力は僕のと違ってクールタイムがない、裏を返せば「僕の能力は君のと違ってクールダウンがある」深海棲艦の血が流れていてもお頭の方はダメだったらしい。

「改めて言う。盃二世、お前を軍法違反で逮捕する」

そう言うって俺は二世の頭を殴り気絶させ、手錠と足枷を付けた。

通信機が鳴る。相手は大佐だ。

「中佐、そっちはどうだ?」

「盃二世とその護衛6名と交戦。護衛は先制攻撃を受けた後に反撃し殺害、二世は逮捕しました」

「御苦労、こっちも終わったところだ」

太陽が水平線の彼方から顔を覗かせ始めた頃に、大本営直属の憲兵隊による盃中将指揮の鎮守府に対する作戦は完了した。

## 祝 入隊

実の父の友で育ての父、そして上司である山吹智久（やまぶきともひさ）に呼び出された。

盃二世との一件で自身の出自も分かり、そして実力を示した。山吹元帥としては実力もあり、信頼できる人間だから親衛隊に入りたいと思っっているのだろう。

大本営海軍元帥室の扉を叩く。

「入れ」

「失礼します」

山吹元帥は静かにこちらを見ている。扉を閉め、机の前まで行く。と、山吹元帥は話始める。

「中佐、いやロイ。ここから先は引き返せないぞ、いいな」

「既に戻りが出来ない状況です。後はもう進むだけです」

「そうか…」

生き延びるには、原作知識を最大限利用するしかない。取り敢えず原作ルートに入れば相棒妖精が出てくるだろうから、親衛隊に入らない理由はない。

「ロイ、君の母親は君を産んですぐに死んだと聞かされているよな」

「はい。父からそう伝えられました」

「長い間騙していてすまなかつたが、君の母親は今も生きている。君の母親は深海棲艦で、海に帰って言ったんだ」

知っています。知識で作者に勝てると思うなよ。この爺。

「母が父と結婚して私を産むまでは、艦娘の姿で生活していた」

「そうだ。ところで君は艦娘と深海棲艦の差を知っているかね？」

「…同質であり同じ存在。コインの表と裏のようなものだ」と

この世界では艦娘＝深海棲艦で、転生するような形で深海棲艦は艦娘になるんだよな（イキリ）。ちなスペック的には深海棲艦の方が艦娘より強いけど、転生前の記憶を引き継げた艦娘（紅海の奇跡の艦娘5人）は深海棲艦と同じ。

だから今後建造されて現れるだろうどの艦娘も、あの5人を超えない。だからこそスターターファイブスという最初の艦娘と最強の艦娘を表す名を与えられた。

「君の言う通りだ。艦娘と深海棲艦は同じ存在だ。では君が言うようにコインなら、ひっくり返る力は何だと思う?」

「死…ですかね。輪廻転生という概念もありますし」

「ああ。だが全ての深海棲艦が艦娘になれるというわけではない」

What!?!そんな話知らないぞ。

「そもそも深海棲艦は、陸で生きていた生物だったんだ」

あつ、長くなりそう(小並感)。

「だが彼女達は陸で栄えることはなかった。他の陸上生物…肉食動物に襲われ、武器という武器を持つていなかった彼女達は各地を転々と、逃げるように生きるしかなかった。そしてある生物が地球を支配する」

人ですか?

「子供の頃、誰もがカッコいいと思ったあの生き物…恐竜だ。恐竜の登場によって彼女達は徐々に海へ追いやられていった。そして、追い込まれた彼女達は海へと逃げて行った。だが、そこも安住の地ではなかった」

へえ、初めて聞いた。

「水中にも恐竜はいた。彼女達は水中での足が遅く、恐竜にとって格好の餌となり、多くの者が喰われた。だが、彼女達は引き返せない。彼女達は進んだ、より深く、暗い深海へ」

水圧でペシヤンコにならない強靱な肉体を持っているからこそ、臍装無しでも十分強いのか。

「深海はそれまでの過酷な環境と違い、平和そのものだった。襲ってくる生き物も、集団でいれば問題はないようなのばかりだったからな。そんな環境だからこそ、彼女達の多くはある気持ちを忘れていった」

「その気持ちは?」

「陸地を闊歩し、風を感じ、太陽の光を眩しく思う気持ちだ」



なんとなく分かる気がする。前世で引き籠り気味だった俺は、外に出る度に太陽の眩しさにいつも懐かしさを感じていた。窓が北向きのせいかもしれないが、普段見ている青空が違うように感じる。

「あるとき、深海にとある生き物が沈んできた。二足歩行で、身なりのよい、かつて陸地で暮らしていた頃の深海棲艦とそっくりな生き物が」

「その生き物が、人間」

「そうだ。彼女達は人間を、正確にはその死体を見て、陸に戻るときが来たと察した。だがそれには大きな問題があった。陸地は既に人間が支配していて、その土地を守る武器を持っていたことだ。いかに深海で生きてきたとしても、その皮膚は柔らかく、鉄の刃で容易に断たれる。故に彼女達は君のような混血を作らせた」

深海棲艦の血を引く者は女王へ忠誠を誓う。それは例え赤子でも、女王という存在を知らなくてもだ。

「私も君も、盃親子も、君の父も、私の父も。全員に深海棲艦の血が流れている。我々は陛下に命を捧げ、彼女達の為に戦う」

かつこよく言ってるけどごめんさい、私死にたくないです。命なんて捧げれないです。

「ああ、それで、艦娘になれる深海棲艦となれない深海棲艦の差はなんですか？」

「すまない、なれるのとなれないの、その違いは陸への憧れだ」

「憧れ？」

「憧れがなければ人間に、かつて陸を闊歩していた頃の姿に戻ろうとは思わない」

憧れ…引き籠りには理解できん。

「私たちの母も、陸に憧れたからこそ艦娘となって父の前に現れ、私を産んだ。元から先祖返りする深海棲艦は一定数はいた。そのメカニズムが最近明らかになったんだ」

つまり、昔は偶然生まれた艦娘を陸に送っていたのか。

「ところで、既に各地で艦娘の建造が始まっているが、何故同一艦が二隻以上いると思う？」

「分かりません…」

艦これには基本的にドロップ制限はない。あるとしても期間限定ドロップのような特別なものだ。無意識だがその無制限ドロップがああ作品を作るときにも反映されているので、理由なんて書いたことは一度もない。

「深海へ彼女達が移住した時にも言ったが、彼女達は武器という武器を持っていなかった。だがそれに転機が訪れる。帆船、蒸気船、内燃機関搭載艦、e t c。人間が戦争をし、それらが沈むことで彼女達はそれらの技術から艦装を手に入れた。そして艦装を装着し、艦娘になれば…記憶を失うことで、艦装の記憶が彼女達の記憶となる」

「…艦装は量産され、記憶は艦装によって与えられる。だから二隻以上存在する」

「同じ事は建造でも起こる。艦娘に必要なのは艦装と彼女達の魂だけ。それなら」

その質問を聞いて一つ疑問に浮かぶ。響や雪風のような沈まなかった艦はどうなるのだ。

「史実で沈まなかった艦も建造されているようですが、先程の説明だと沈まなければ艦装は手に入れないのでは？」

「そうだ。その艦の艦装を直接手に入れることはできない。だがその魂はどうだ？船員が病や事故で亡くなり、遺骨が海に撒かれれば。船員たちを通じて艦の魂は海に還り、同型艦の艦装に宿る。まあ、それで出来る艦装の数は少ないけどね」

一通りは喋りつくした。では本題に入らせよう。

「なぜ閣下はそれらを御存知で？」

「…本題に入ろう」

場の空気が引き締まる。山吹元帥は机から紙を出す。

「私は深海棲艦…彼女達の女王が指揮する部隊である親衛隊の一員だ」

ナツ、ナンダッター（棒読み）

「君は盃二世の逮捕で彼女達への優しさと実力を証明した。私は君を

親衛隊の一員にしたい。君さえよければ、この書類に名前を書いてくれ」

山吹元帥から紙を貰う。ざっと目を通すと誓約書のようなもので、秘密の厳守や任務遂行、忠誠やらなんやらが書いてある。俺は山吹元帥の机からペンを取り、署名欄に名を書く。

「即決か…ところで、親衛隊では本名を使わず、コードネームで呼び合う。私の場合は將軍だ。自分で決めるか陛下から与えられるか、どちらがいい？」

「自分の名前ですから、自分で決めます…V。Vでお願いします」

「V? ヴイツフェのVか？」

「違います。勝利のVです」

負けない。原作において、ロイの敗北はバッドエンドに繋がる。負けるわけにはいかない。

「君にも直に深海の方から妖精が専属でつく。親衛隊との連絡や報告は妖精を通じてくれ」

あつ、相棒妖精君の強制合流か。

「改めて頼んだぞ、V。彼女達との真の理解の為に」

「彼女達との真の理解の為に」

## 敵を討ち滅ぼす簡単な仕事です

### 前略

新しい環境に慣れるのに忙しかった4月が終わり、五月病に平時なら苦しむ時季となりました。親衛隊の皆様におかれましては、陛下への忠誠をより一層固いものとし、任務に励んでいると推察します。

さて、ところでいつ私の相棒妖精は来るのでしょうか。入隊したときに將軍から近いうちと言われてから、既に一カ月程経ちました。相棒妖精がいなければ定時連絡も任務の通達を受けることも、これから先生き残ることもできません。はよ来いや!! (豹変) 陛下のいらっしやる海底都市、爆雷で吹き飛ばすぞ!! (謀反)

今日も元帥の部下から手紙に扮した任務の通告文を受け取る。内容は近々行われる攻勢作戦に関する物だった。

深海棲艦との大規模な戦闘が予想される今回の作戦で、主力や準主力が前線に行き、低練度の艦娘が防衛を行うため防衛網が疎かになる。作戦の延期は不可能なため、低練度艦のレベリングは不可能。そのため万々に備え、出撃準備をしろとのことだった。

今回の作戦で出撃するのは日本列島の太平洋に面した鎮守府のみのため、愛知県か三重県の鎮守府にいれば問題ないだろう、車に試作兵器積めて出発しよう。

「第一艦隊、第二艦隊、遠征艦隊…まずいな、どうしても防衛戦力が弱い」

「出撃艦隊から引き抜いてはどうだ?他の鎮守府からも艦隊は出るのだろうか?」

「いや、他の鎮守府とは戦う海域が少し離れている。援軍はあまり期待できない」

「主力に練度上げを集中させたのが仇となったか…。残った僅かな時間で最大限練度向上できるようするしかないか」

東海三県にあるとある鎮守府。その提督は今年の春に海軍訓練

学校を卒業し晴れて海軍に入隊する予定だったが、提督適性検査にて甲判定が出され、卒業直前で配属された。

訓練学校で学んだことを活かしつつも、やはり不慣れなこともあり万遍なく練度を上げることが難しく、一部の主力艦の練度が突出して高い状況になっていた。

「発令まであまり時間がない。君達主力艦隊は英気を養ってくれ。防衛網の方は何とかする」

「提督…分かった。信じる」

秘書艦が退出し、執務室には提督一人だけとなる。彼はその後大本营を始め舞鶴を始めとする攻勢作戦に参加しない鎮守府に連絡し、艦隊を貸してくれないか交渉した。しかしその行動は実を結ばず、艦隊が貸与されることはなかった。

日本が初めて行った攻勢作戦、その目標はシーレーンの崩壊によって孤立していた沖縄を始めとする沖縄諸島までの制海権と、台湾へ艦隊を常駐させることだった。

これまでの本土付近に出現した深海棲艦の撃滅から、制海権の奪取という攻撃に移れたのは、建造によって艦娘の数が増え、演習によって戦闘能力が向上したからだだった。

そのため、これまではおっかなびづくり行っていた民間人の輸送を、護衛無しでも安全に行えるようにするため沖縄の制海権確保が目的となった。

一方で台湾への艦隊駐留は、艦娘の建造技術などを台湾も持つことで、従来の西側諸国の関係性を維持するのと台湾が対深海棲艦の戦力を持つことで、日本の負担を軽減させる目的があった。

日本と台湾はどちらも完全な島国。そのため深海棲艦の脅威は理解しており、艦娘の建造技術は喉から手が出るほど欲しかった。

「始まったな」

出撃ドックから出ていく艦娘を鉄塔の上から見守る。沖縄諸島は日本本土に近いしゲーム的には低難易度海域の筈。だがもしかした

らこの攻勢作戦は菊水作戦？（うろ覚え）の大和特攻に関したもので、激戦になるのかもしれない。

だが大丈夫だろう。沖縄の空軍基地から飛び立った偵察機による報告では、深海棲艦の数は北方よりも少なく、民間人の本土疎開のために護衛に参加した艦娘からも本土近海に出現するのと同程度の強さと評された。そこにスターターズ（スターターファイブスの略）が参加するなら安泰だろう。

問題は寧ろこつち。

主力が出払った頃を見計らってすれ違いで深海棲艦が本土襲撃を行った場合、多くが10〜20の低練度防衛艦隊の敗北は避けられない。俺もこうしてスタンバっているが、同時に起きたらどちらかは突破されることになる。

「――艦隊、異常なし」

「||||艦隊も、はぐれを撃破した」

「~~~~艦隊の哨戒海域では異状なし」

鉄塔に送られてくる情報を直接受け取り、出撃の必要性の有無を判断する。山吹元帥からも、判断は自分で下せと言われている。

「\*\*\*艦隊、援軍要請!! 敵ル級を筆頭とする打撃艦隊、総数6。我方軽巡旗艦駆逐3の小規模水雷戦隊」

「了解、大本営出張艦、抜錨する。位置を送れ」

鉄塔から飛び降り、海面に着水。送られてきた位置に行く。

「大本営出張艦、こちら\*\*\*艦隊旗艦由良、到着時刻は何時頃になる予定か」

「こちら出張艦…長いからVでいい。およそ10分。それまで貴艦隊は敵打撃艦隊の射程ギリギリ圏外を維持してもらいたい」

「V、こちら由良。要請を了解。ですが駆逐艦の一隻中破し、射程圏内から脱出できません」

「了解、必要時間を5分繰り上げてくれ」

使い捨てのジェット噴進機を使い、文字通り風になって進む。地味に痛い。目が乾燥する。波飛沫が本当に痛い。

だがその苦しみに堪えた甲斐があり、直ぐに目視で由良の艦隊を発

見することができた。

「こちらV、貴艦隊を目視で捉えた。打撃艦隊の位置は分かるか？」

「SE方向、詳細距離不明、ただし敵艦隊の射程圏内です!!」

「感謝!!」

使った噴進機をロケットランチャーに詰める。

「敵艦発砲!!」

由良の艦隊の駆逐艦の叫びが無線に乗って聞こえる。その光はこつちからも見えた。

「見つけた、吹き飛ばせ!!」

噴進機を発射する。

可能な限り多機能で高性能を求めた結果の一つである噴進機ランチャーは、行きで使った噴進機をランチャーに詰め、予備の噴進剤で着火し、ロケット弾になってもらう武器である。予備の噴進剤は移動では使われないし、爆薬だってしつかり入っているから、攻撃力もある。勿論事故が起き、足元で爆発したら即御陀仏でもある。

「V!?!」

「安心しろ、ただの噴進兵器だ」

「あっはい」

噴進弾はル級の近くで爆発する。一方でル級の砲弾が由良の艦隊に迫ってきており、おそらく中破の駆逐艦に直撃する。ゲームでは大破していなければ沈まなかったが、現実には保証できない。

トラウマの発生を防ぐためにも、親衛隊としての義務を果たすためにも必ず守る。

「リフレックス!!」

自分に向け銃を発砲することで、リフレックスモードになる。弾速が遅いものを使用しているのと考えて行動する時間は十分にある。

「完全に無害化するには…墜とす!!」

陸軍の方の元帥に集ってもらった狙撃銃で砲弾に当たるよう撃つ。確信が持てたら拳銃自殺にならないよう頭を動かす。

銃弾が風を起こし、肝がヒヤツとする。

「??????」

由良がこつちを見てほかんとしている。どうした？

「敵艦隊はこちらで片付ける。流れ弾等に注意しろ!!」

そうやって敵打撃艦隊に近付く。編成はル級1、リ級2、ホ級1、エビ（駆逐艦）2の空母なし編成だ。

「チャフ散布を散布する」

チャフ、と書かれた柄付き手榴弾を空中高く放り投げ撃ち抜く。するとアルミホイルが散布され、電波を遮断する。

「|||||||か!!」

無線越しに由良の声が聞こえるが、チャフに邪魔されてノイズしか聞こえない。

だがそれだけ電波を遮断しているというだけで、電探射撃による被害を防ぐことができた。それを証明するようにさつきからル級の砲撃はあさつての方向に飛んでいっている。

「さつきと片付ける」

全速力で近づき、旗艦のル級の首を軍用ナイフで搔つ切る。するとリ級が条件反射で砲撃してきた。

「馬鹿め、リフレックス発動だ」

エビの頭に向けて拳銃を一回ずつ発砲したら、砲撃してこなかったリ級の顔に投げナイフを投げる。砲撃してきたリ級には使わなかった噴進機を投げ、眼前にきたら撃つて爆発させる。

勝ちを確信したので、一、二歩横にずれる。

「こちらV、敵艦隊を殲滅した」

「?????!!、ありがとうございます!!」

付近を見回し、特に艦影がないことを確認する。電探にも感はない。

しかし妙な風を感じたので空を見ると、何か巨大な水上機がこちらに迫ってきていた。外観からして日本機のため攻撃はしないが、万一に備えいつでも撃てる姿勢をとる。

その水上機：正確には水上機化した一式陸攻が着水し、眼前に扉が来る。機が止まるとその扉も開き、中からは妖精が出てくる。

「中佐、新たに救援要請が入っております。対象は輸送船団の護衛艦



隊、駆逐4のみです」

「そ、そうか。しかし弾薬類が連戦に耐えれないので鎮守府に戻り補給をしなければ」

「その点については策があります。この陸攻で送りますのでお乗りください」

「…ありがとうございます。彼女達を乗せても大丈夫かな？」

由良の艦隊を見る。危機は去ったが帰投まで何も無い保証はない。出来ることならこの陸攻で鎮守府まで運んでほしかった。

妖精は由良達を見ると二つ返事です承し、俺達は陸攻に乗り、備え付けの椅子に座って僅かな休息をとった。

役得役得ウ!!

機内で板チョコを齧りつつ妖精からの説明を聞く。武器に関しては機の武装を使うそうで、そのまま現場に向かっていた。

由良の率いていた艦隊：時雨、夕立、村雨の4人は、俺を降した後  
に鎮守府へ送るらしい。

「…」ジーツ

「…」

夕立が俺をめっちゃ見てくる、かわいい。

目線からして板チョコを見ている、多分欲しいんだろう。

「いるか、チョコ?」

「ツ!?くれるっぽい!」

「ああ、3人もいるか?」

由良や他2人にも聞く。夕立が少し騒いだので全員がチョコのこ  
とを気にしている。

「いただけるのであれば・・・」

「僕も欲しいかな」

「くっださーい!!…ウフフ」

いいな、ここが天国か。

容量の少ないバックパックから板チョコを4枚出す。溶けるのが  
嫌なので態々冷却しており、カチカチキンキンである。

駆逐艦は奪うように取るとすぐに銀紙を剥し、食べ始める。由良は  
「ありがとうございます」と言つて微笑んだ後、1ピースずつ丁寧に食  
べる。あゝあゝー?かわいい!!

塗装されていないピエロの仮面被っているからバレていないだろ  
うが、今滅茶苦茶にちやおじやつてるわ!!

夕立なんかもう食べ終えて姉妹にチョコもらえないか交渉して失  
敗してしよげてるし、村雨はなんか色気のある食べ方してるし、時雨  
なんかもう言葉はいらぬ、感じる!!

ハ→ア→ア→ア→!!

待つてろ提督ライフウウ!!俺は、絶対合格して見せる、うゝわゝ

あゝあゝあゝ!!

「助けていただいて、ありがとうございます」

「チョコを食べ終えた由良が話しかけてくる。駆逐艦3人は疲れたのか寝ていた。」

「任務でしたし、仮に任務でなかったとしても当然のことをしたままでです」

「トラウマ、怖い。カレー、食えない。」

「だとしても、あのままだったら誰か沈んでました」

「このままだと多分会話が無限ループするだろうから、話題を変えろ。」

「そういえば、夕立やあなたは改二になれば第一線で活躍できますよね?なぜ哨戒を?」

「実は、着任が少し遅くて。先に着任していた他の艦娘さんが集中運用されていたので、中々出番が回ってこず、まだ第一改装も済んでません」

「ああ、あるよね。俺も出撃艦隊固定してたわ。初心者あるあるだね。」

「だけど提督さんも、私たちが改二になれば強いことは知っていたので、安全でも経験が多く積める哨戒に出してくれました」

「優秀やん。遠征でも少し練度は上がるので、新艦さんは遠征かキスカに送る。この世界なら自主練だろうが、あれ統計データの的には効率が遠征より悪い。演習だと経験値美味しいのよね、なんでだろ。」

「ち、中佐、まもなく射程内なので準備お願いします」

「4人がかわいいのでねっとり視か…」

「こうして憲兵兼出張艦として活動してながらも話したことのある艦娘は少なく、艦装等の知識を得る為観察していた時、乗るよう促した妖精が現れ準備をお願いされる。」

「準備?機の武装を使うから銃座とかに着けというわけか?」

「あー、似たようなものです。こちらに」

案内したいようなので、席を立ってついていく。

「これです。これに乗ってください」

そこにはコックピットがあった。あー、勘違いされなかったために言うが、そのコックピットは陸攻のコックピットではない。陸攻の床に突然コックピットの区画があるのだ。

そして俺はこんな感じのコックピットを知っている。初めて見たのは古い短編戦争アニメで、そのアニメはとある青年がそれに乗って空母を沈めるという内容だ。

勿論その兵器は史実でも生まれており、日本の技術の凄さを知らしめるものだ。

「チェリーブロッサム…桜花に乗れと」

「はい、桜花に搭乗。そして敵艦隊を攻撃します」

「・・・いいだろう」

桜花のコックピットに入り、基本操作を確認する。妖精の改造のおかげかゲームみたいに簡単に操作できそうだ。

「…ある程度は自動で誘導されるので、細やかな修正をお願いします」  
そう言って妖精が去ろうとするので、声をかけ止める。

「彼女達を送ってくれる礼だ。ありがとう」

残っている板チョコを全て投げ渡す。リフレックス連続発動後の疲労をすぐに回復するために持ってきたものだが、このままだと使わないだろう。それに彼女達を運んでくれる代金としても有効だろう。妖精は甘いものが好きという風潮だし。

防風窓を閉め、電源を入れる。

「敵艦隊射程に入りました。切り離します」

ガコンという接続が外れる音とともに落ちる感覚が体を震えさせる。

「エンジン点火!!」

射撃ボタンに似た点火スイッチを押す。…押す。………押す。

「エンジンが点かない!」

後方を見るが、やはりエンジンは火を噴いておらず、桜花本体は自由落下をするだけだった。このままじゃ機体が下向きになって、仮に

エンジンが作動しても海面に突っ込むだけだ。

「動けこのポンコツが、動けてんだよ!!」

計器がたくさんついている場所を何回か叩く。すると後ろの方から噴進音がした。

「できた。この手に限る」

桜花のエンジンが火を激しく噴く。まさに音速雷撃。塵レベルの小ささだった敵艦隊が豆粒大には大きくなる。

リ級2、駆逐4の敵編成。救援要請したのは第六駆逐隊で煙幕を張って回避行動を続けている。

「自動誘導終了、後はご自分でお願いします。ブリッジ」

機械音が非情にそれを告げる。

格ゲーのコントローラーみたいなガチャガチャ(レバー)を操作し、リ級にぶつかるようコース設定する。駆逐4は爆発とかで巻き込まれて沈むだろう、多分。

「当たれえ!!」

桜花がリ級にぶつかり、爆発に巻き込まれる。リフレックスで死ぬのを確信していたが、こちらにも爆発に巻き込まれており、苦しい。

だが機内であった白露型と由良の笑顔を思い出し、あれに貢献できたならと回想して多少満足していると、海面に打ち付けられる。

「え? 何で死んでないの」

自然と口から零れる。あたりを見渡してもリ級はおろか駆逐もない。いるのは六駆だけ。それほど強力な爆発に巻き込まれたなら死ななきやおかしくないか?

「V聞こえてるか? 攻勢作戦は無事完了した。帰投してくれ」

「りよ、了解しました」

山吹元帥からの帰投命令を受け、大本営に針路を採る。ホントにどうして生きてるの? 再生能力も付与された?

海域の中央に立っていても危険なだけなので、取り敢えずは出撃拠点に針路をとった。

おひゃ

初めての攻勢作戦を無事完了した後、俺は訓練学校の校長室にいた。理由は単純、出席日数の不足によって卒業が危ぶまれていたからだ。勿論学校側は俺が憲兵として活動しているのを知っているし、そのため多くの授業が免除されている。例を挙げるなら、護身術や射撃訓練、その他様々な物品の使用方法など e t c . . . 。

だが憲兵として活動しても養われない知識や能力：艦隊の運用方法とかに関する授業は受けなければならない。しかし治安維持のために出動することも多いので免除されていない授業を休むことも多かった。

「何とかならないんですか。休日にとやるとか、夜もやるとか」

「この戦時下、月月火水木金金、休日なんか無い。夜もやるとなると教官側に問題が起こる」

「現場の提督や憲兵隊は夜も活動しています。それがここではできないのですか？」

「いやそうしたいのは山々だが・・・」

すまないな校長、俺はどうしても提督にならなければならないんだ。なつて艦娘たちと仲良く暮らしたいんだ!!そのためなら俺は、実現可能な理想を実現するよう求めるモンスタークレーマーにもなる!!

「中佐、山吹元帥より電話です」

この学校にて唯一の専業憲兵が扉を開けて言う。山吹元帥からの電話となればこの場を離れなければならない。

「わかった。・・・また話しましょう」

校長を睨みつつ言う。校長は二度と来てほしくなさそうな顔をしていたが俺としてはどうでもいい。俺の提督ライフの方が重要だ。

「もしもし、ロイです」

繋がっていた電話に出る。

「おお、V。今すぐこつちに来てくれ。会わせたい奴がいる」

「会わせたい奴? いいですが、このままだと提督訓練学校を卒業でき

ません」

「単位か…こちらで何とかする。まずは来てくれ」

「分かりました」

電話を切る。すぐに憲兵用の車に乗り込み出発する。

会わせたい奴…会わせたい奴…相棒妖精か？

本編で出会う時期とはもう数ヶ月もズレてるが、会わせたい奴なんて言われても相棒妖精しか出てこない。

てかこの前航空機で会ったあの妖精が相棒妖精だろ。一式陸攻を水上機に改造できるのなんて明石か夕張か相棒妖精ぐらいだ。そしてあの桜花。艦これでは確か特攻兵器は実装されていない。実装されていないものは明石が改修したとしてもできないし、艦娘は総じて特攻兵器を嫌っていたから作らない筈だ。

だとしたら桜花を作るのは相棒妖精だけ。あのときは気付かなかったが、もう既に会っていたんだ。あとはコンビになって行動するだけ。

そしてこの後大本営で会ってコンビになる。そしたら夢の超技術による兵器群が…。

「な…な…」

「おお、遅かったな。早く挨拶してくれ」

「あ…ああ。は、初めまして…」

元帥室で手を差し出し、握手をする。握られた手は温かく、女の子特有のいい匂いがするが、それを堪能することはできない。

「一度見たことあると思うが、もう忘れてしまったか。自己紹介を」  
「わかった!!」

山吹元帥に促され、彼女は自己紹介をする。

「白露型一番艦、白露です。はい、一番艦です。久しぶりだね、ロイ!!」  
「…」

相棒妖精はどこですか？超技術の兵器群はいつ手に入るんですか？

「や、山吹元帥…」

「そうか、完全に忘れていたのか。なにしろもう二か月前だからな」  
「い、いえ。そういうわけでは」

「なーに。そういうこともある。白露君。君と彼がどこで会ったか  
言ってやれ」

いや覚えてるよ!!盃二世のどこにいた白露だろ!?こつちを見る目が英雄を見る目だからすぐに分かったよ。俺が言いたいの相棒妖精はどこだっていう話だよ!!

「はい!!あなたと出会ったのは盃一世がまだ大臣をしていたころ…」

そう切り出して話始めた白露は機関銃のように話続けており、もはやこつちを見てなかった。

「山吹元帥、以前から要請しています妖精の配属の方はどうなっておりますか」

白露にバレないようこつそり近付き小声で聞く。山吹元帥はそんなこともあったなというような顔でしばし考えた後、答えた。

「いやー、こつちでも君に合いそうな妖精を探しておるんだが、中々見当たらずな」

「この前私を一式陸攻に乗せて桜花で射出したあの妖精はどうですか?」

「ここまで延ばされたらもう指名してやるしかない。延ばされ続けて本編開始はまじで避けなくちゃならない。」

「あの妖精は謹慎処分を受けてな。桜花のことを噴進弾として計画書に出したのが発覚してもう数年は牢の中だ」

「ファッ!?なにやってんのあのバカ妖精。計画書位真面目に書けよ!!おかげでこつちにも被害が来るやん!!」

「お、桜花のことですが、着弾しても私にはなんの被害がなかったの  
で、罰する必要は…」

「女王陛下自らが罰するようにと厳命された。おれらじゃどうにもならん」

なにしとんねん無能クソババア!!そいつがいなきやこの先どうにもできねえよ!!

「そ、そうであってもあの技術力は必要です。私が監視をしますので、



あの妖精を配属してください…」

「お願いします、色々試作兵器を作っているけどやっぱり限界があるんです。」

「…陛下自ら厳罰を命じたんだ。難しいぞ」

「構いません。勝利にはあの技術力が必要です」

「おれの方から働きかけてみる。その間にロイ君にはこの仕事をやってほしい」

山吹元帥から命令書が渡される。中をざっと見ると島の調査らしい。山吹元帥は作戦海域の海域図を出す。

「目標の島付近を通過した艦隊が全て行方不明になっている。戦艦、空母も行方不明になっていることから、姫もしくは鬼級がいる可能性がある。だが公式にはまだ存在が確認されていない。あの5人も今は北方海域に出撃している」

「そこで私の出番と」

「ああ。ロイ君達にはこの島とその近海を調査してもらい、可能なら根本的な解決をしてもらう」

「待つて下さい、達？達つてまさか」

勿論のことだが、俺は基本的に一人だ。親衛隊としての側面や実力の問題でチームを組めない。スターターフェイスがいるが、今は北方で任務に当たっている。だが山吹元帥の言い方からして複数人で任務に当たるのは確実だ。そしてこの部屋にはもう一人いる。

「ああ。今日から君と白露君はチームだ」

「…白露」

「そこでね、ロイが妖精に叫んで」

「白露!!」

「は、はい!!」

元帥と話していて忘れていたが、白露はまだ喋っていた。俺達の会話を意に介せず喋り続けているのだから、大したものだ。

「お前、新しい配属先は？」

「ロイのところだよ？」

「…山吹元帥、なぜ白露を配属したんですか」

こういつてはなんだが、白露は一般的な艦娘だ。スターターファイブスのように記憶を持つているわけでもなければ歴戦の玄人でもない。実戦経験すらないようだ。

そんな新人を危険地帯に基本単独で突っ込んで土地は荒らして敵は皆殺しにする我ながら頭のおかしい隊に入れるのはどうかしていると思う。

「白露君はロイ君の大ファンでね」

「ファンだけで配属ですか？」

「いや…あまりにもロイ君のことを尊敬し過ぎて各所を盥回し。そしてロイ君のところに来たんだ」

「そうでありますか」

尊敬しすぎで盥回しって…宗教でも作ったのか？唯一神にして救世主であるロイ様を讃えよとか、24時間俺のことを喋り続けて関係悪化とか…。そもそも一憲兵に対する熱意じゃないよ、あれは。

「もういいかね、質問は」

「はい…」

質問はないけど不安なら腐る程ありますねえ!!

「では、改めて任務を通達する。ロイ・ヴィツフェ・ヒドルフ並びに白露は呼称名ハ島を調査し、問題の根本的解決をせよ」

「了解!!」

## 南国の島でバカンス…にはならない

雲の上を悠々と飛ぶ偵察機の中に、俺と白露はいた。ハ島の調査を命じられた俺達だが、海路を行けば行方不明となった娘たちと同じになると思ひ、新式高高度偵察機「星」に乗って移動していた。

落下防止策に背中を預け、持っている武器の点検をする。といってもやれるのは目視による簡易点検だけで細かなことはできない。

「心許ないな」

港湾棲姫を始めとする陸上型の深海棲艦とドンパチやるのに、ハン ドガン一丁じゃ火力が足りない。白露も特二式内火艇を積んでないし、何なら改二ですらない。それで陸上型相手は辛いどころの騒ぎじゃない。長期戦になるのは確定的だ。そうなると補給や援軍の観点で敵が有利になる。

なので闇夜に紛れて空挺降下し、姫級を奇襲で一掃、残りの陸上砲台や通常の深海棲艦を殲滅する。典型的で博打的な夜襲作戦だが、陸上型が確認されていない現状これしか手段は無い。

「あ、ここにいた。ロイー!!作戦開始まで後5分だよ」

白露が扉を開けてやってくる。

「武器と所持品の点検は終わったか?」

「うん。いつでもいけるよ」

「そうか」

時計を見ながら、機内電話を掛ける。

「機長、そろそろ時間だ。問題はないか」

「現在地は予定通りだ。雲の下は間違いないくハ島だ」

「分かった。降下準備」

「了解、投下態勢に入る。各員準備」

ブザーが鳴り、機械音が響く。

「わ、何々、このブザー!?!」

「白露、こっちに來い」

「わ、分かったけど・・・」

困惑しながらこっちに近付いてきた白露の腕を右腕で掴む。

「え、ロイ？」

「降下だ」

柵を越え開いた投下口から落ちる。

ハ島に光は無く、闇夜に紛れて輪郭が朧げに見える。

「パラシュート!!早く開いてよロイ!!」

「ダメだ!!下手に開けば電探に引っ掛かる」

パラシュートは一つしかない。そのため白露は俺の手から開くための紐を奪おうと必死だが、電探に引っ掛かる可能性がある以上ギリギリを攻めたい。

「私高所恐怖症なの!!早く開いて!!」

「俺もだよ!!だとしても開けないんだ!!」

「どうしてえ?高所恐怖症なら早く開いてよ!!」

「開いたら高い所にいる時間は長くなる。ならいつそのこと一気に地上すれすれまで落ちる!!」

「だとしても私ロイの腕にしがみつくしかないんだよ!!」

あ

「ごめん」

白露を掴んでいる右腕を左腕に変え、弓を引くようにして白露が正面に来るようにする。そうしたら右腕を白露の背中に回し、抱くようにして近付ける。

「あ、あわ、あわわあ」

「体に手を回せ、腕よりはまじだろ」

「わ、わかたた、わかった!!」

白露の体温が肌と肌が触れ合うことで伝わってくる。

ハ島まで後少し。パラシュートを開き、安全に降下できる場所を探す。島の中央部が開けていて良立地と思ったが、不自然さを感じ森に落ちた。

「大丈夫か白露」

「大丈夫だよ。連装砲もちゃんと動いてる」

パラシュートを外して再度武装の点検をする。着地―というよりは墜落―の衝撃は小さくなかったので、砲塔の旋回に問題がないか調べさせていた。

「GPS情報喪失地点に向かう。付いてこい」

有名な話ではあるが、軍の艦艇は勿論艦娘にもGPSが付けられている。羅針盤の逸れに提督側がいち早く気付くために付けられたものだ。今回はそれが途絶えた場所に行くことで陸上型の追跡をしようとしていた。

周囲の気配を気にしながら進んでいくが何もいない。待ち伏せかとも思ったが、視線も感じない。

「…何もいないな」

「何もいないねー」

GPSの喪失地点に着いてもそれは変わらなかった。

「周辺に艀装がないか調査する。散開」

俺は波に打ち上げられていないか浜辺を中心に艀装がないか調べる。白露は逆に海側、漂ってないか調べる。白い砂浜でいい場所だと思いつながら調べていると、無線が鳴る。

「ロイ聞こえる？ハ島に漂着した人がいるみたい」

「漂着？浜辺には見えないな」

「よくわからないけど救難信号を送ってるから、救助活動に入るね」

「…分かった」

胸の内のざわつきを抑えながら救難信号を探す。無線の周波数を徐々に変えながら探すがどれもノイズばかりで救難信号なんてなかった。

「白露？救難信号は確認できなかつたぞ」

無線を通じて呼びかけるが反応がない。

「おい白露？白露?!」

行方不明、そう感じた瞬間には無線のチャンネルと周波数を変えていた。

「山吹元帥、白露のGPSは今どこです!!」

「ロイ君か!!白露君の現在地は…ハ島西岸の崖に向って航行中だ」

大きく跳躍。深海棲艦の身体能力で東岸の砂浜から西岸の崖へ跳ぶ。

「だが可笑しいんだ、白露君はGPSによると減速することなく崖へ向かっている、仮に錨を下ろしても座礁してしまう!!」

「八島に巣くう悪魔は救難信号を発信して艦娘を呼び寄せていました、白露のGPS情報から目を離さないで!!」

「分かっている!!だがこの速度は…ぶつかる!!」

無線越しに山吹元帥が悲痛な叫びをあげる。俺も白露の衝突音がしないかと気を張り巡らせる。

だが、衝突音は一切しなかった。

「山吹元帥?」

「…ロイ君、現時刻を以って作戦目標を調査から殲滅に変更する」  
「何があつたんです…」

「白露君のGPS情報が崖の内側3Mで途絶えた。つまり、敵は島の地下に基地を作っている」

だから艦装の残骸が見当たらなかったのか、クソ!!

「見つけました、縦およそ5M、横7Mの入り口です。さっきまではありませんでした」

「食人一家と同じ天然か、それとも人工か。気を付けて進め」

中に入ると無線は繋がらなくなった。トンネルのような水路を抜けると、そこは埠頭だった。

「どういうことだ。深海棲艦の陸上拠点は地下基地なのか?」

全体を見るが、人間のものと酷似している。

「これは…深海棲艦じゃなさそうだな」

上陸し、銃を構える。監視塔のような建物はなかったので狙撃される心配はない。

「こちらロイ、これより八島を制圧する」

通じない無線にそう呟き、奥へ進んだ。

嗚呼、懐かしき

「こんな真夜中に招集してすまないが、緊急事態だ。許してくれ」

大本営の会議室に集まったのは、横須賀の鎮守府に着任している提督たちだった。

「構いませんよ。この状況で安眠ができるなんて思っていないんですけど」

「今回の招集は何ですか？第七鎮守府の件ですか？」

「いや、今回集まってもらったのは深海棲艦が侵攻の準備をしているからだ」

その一言で、雰囲気が一層引き締まる。

「現在作戦部が南方進出拠点設営計画、丸計画を練っているのは以前通知した通りだ。そして候補地がこのサ島。大きく拠点設営に向いた地形だ」

山吹は海図を取り出し、サ島を指し示す。

「そして、深海棲艦が目撃されたのがこのハ島近海。報告によると奴らは揚陸艦数隻をハ島に上陸させたようだ」

「ハ島はサ島に比べれば少し小さいが地形はいい。さらに南方寄りでの前進基地としては最高の島」

「ここに奴らは拠点を造ろうとしている。もし奴らに先手を取られれば丸計画は実現困難となり、南方への足掛かりを失うだけでなく、本土へ南方の深海棲艦が襲来する第一歩となる!!」

山吹は海図の貼ってある掲示板を叩き、集まった提督たちに言う。「諸君にはこれから、ハ島に拠点設営を目論む敵艦隊を撃滅。陸上戦力を殲滅してもらいたい!!」

事実上の作戦の通達。それを受けて提督たちは細部の打ち合わせを始める。

「この位置だと今から出撃しても朝だな…」

「艦隊戦と陸上戦を主眼に置いた艦隊、複数の艦隊で出撃するのか」「情報が必要だ。ハ島に星を複数送って敵艦隊の編成を調べさせる」

「・・・」

埠頭の近くにあった倉庫を調べていると、ここはやはり人間の施設だということが確認できた。食糧、水、衣類、e t c。深海棲艦が絶対に使わないものばかりがあった。

この地下はとても広く、天井に照明がなければ地下だと気付けない、某猫型ロボットの大長編に出てくる地下王国のようだ。そしてこの地下は埠頭、倉庫、市街地の三つで構成されている。

そして白露だが、恐らく埠頭や倉庫を越えた先にある町の様なエリアにいる可能性が高い。これは確証はないが、それぞれの区画の目的からそう推理できる。

埠頭区画は大きい、物資の搬入がしやすいようかなり大きく作られており、艦娘をどうこうできる施設は作れない。

倉庫区画は大量の物資を置いておくので場所に余裕がない。

そうなるとう除去法で市街地区画が一番可能性がある。何しろ人口一万人はありそうな広さなのだ。施設があるとすれば市街地区画。

市街地区画と勝手に呼称していた区画は、限りなく市街地に似ていた。電柱、街並み、川に橋。そのどれもが日常の光景だった。

「大柳ドラック・・・」

看板が目にとまる。この店も実在する。ここまで同じだと市街地での戦闘データを取るための実験場と思ってしまう。

「・・・」

少しの間、その看板を見つめる。なにか違和感を感じ、それがなにか知りたかった。

その答えは早く返ってきた。

発砲音、そして穴が開いた看板、遅くなる世界。

「リフレックス!?監視されていたのか」

周りを見れば、四方八方から銃撃されていた。銃は寄せ集め、服も戦闘服ではないので民兵集団だと分かる。

その場は一旦離れ、物陰に隠れる。



「消えただと!?!」

「馬鹿な!!」

「こちらハウンド1、ターゲットが消えた、どこにいるか探れるか?」  
混乱している間に、俺はその場を離れた。

風潰しで建物に入っては調べを繰り返すことで、ある程度のこと  
分かってきた。

一つはこの市街地区画はあの民兵集団の居住地で、ここでは何も  
していないこと。もう一つは、民兵集団の武器はテロリストやゲリラの  
使うような大量生産の銃を使っていることだ。つまりここで何かを  
している集団は、巨大な犯罪組織で艦娘売買をしている可能性が高  
い。

「だとしても、この地下街は謎だが」

構成員の福利厚生を目的にしていたとしても、この見た目にする必  
要はない。生物兵器の類の実戦データを採るためだとしても、未だに  
それが追手として来ていないのでそれも無いのだろう。

「だーっ、とにかく、白露を探さなきゃな」

白露を探す手段は既に確保した。この街にある物で位置情報を受  
け取る道具を作った。これを使えば白露の服に付けた発信機の情報  
を受け取れる。

「ほら出てこいよ出てこいよ、あつ出てきた」

ピコンと位置を示す○が出てくる。結構近い。

「…あの家か」

隠れていた民家を出て、白露のいるはずの家に入る。ここもやはり  
普通の民家で、生活感を感じられる。

「白露、いるか!!」

声を掛けながら一部屋一部屋調べるが、いない。クローゼットなど  
の人がいれる空間を全て調べたが、やはりいない。

「まさか…:な」

無いだろうと思いつつ、床を蹴る。初めはただへこんだだけの床  
だったがやがて鋼鉄の建材が出てきた。

「うーん、やっぱり地下か」

あの部隊の指揮所が見当たらなかったのも、もしかしたらと思っていたが、やはり地下があった。この材質は硬いが、全力でやれば破壊できるはず…。

「オーリヤー!!」

拳が若干痛いけど、それでも貫通した。貫通した手で天井を持ち、引きががす。重くて不快な金属音に耐えながら、限界まで引きががす。

「ヒヤーツ!!…ロイ?」

「そつちに行く、少し退いてろ」

穴から白露のいたところに落ちる。如何やら独房のようだ。

「連れてこられたのか」

「うん。救難信号を受けて来たから、埠頭で気絶させられて。気付いたらここにいたの。艀装も取られちゃったし」

「分かった。艀装を取り返したら山吹元帥に連絡を取り、ここを爆撃してもらおう。付いてこい」

独房の鍵を銃で壊す。他の独房も確認したが、他にはいなかった。扉を開けると、そこには看守がいた。

「お、お前、まさか上で噂の!!」

「動くな」

拳銃を突き付ける。流石に相手は反応できず、両手を上げた。

「ここで何をしている」

「し、知らねえ…」

看守の耳を掠めるように撃つ。

「もう一度聞く。ここで何をしている」

「ホントに知らねえよ!!俺達は雇われているだけの傭兵で…」

「雇い主は?」

「わ、分からねえ。見ることはあるけど下つ端の俺には。た、ただいつも白衣を着ていた男だ。研究者だ!!」

「そうか」

もうこれ以上は聞けないと思ったので、撃った。白露は何故撃ったのかと言いたげな顔をしている。

「……ここは爆撃されるんだ。だったら生き埋めよりこっちの方が苦しまない」

我ながら最低の言い訳だと思いながらも、看守の持っていた鍵類を取る。

「地図が示すに、通信室に行く途中に司令部がある。道中でここを襲い、敵の連携を崩す」

白露に予備の拳銃を渡し、巡回兵士を倒しながら進む。白露は後ろで隠れながら進んでおり、怯えているようにも見えた。

司令部には特に大きな抵抗もなく到着できた。やはり装備も練度も悪いので大した障害にならない。

「動くな!!腕を頭の後ろで組み床に伏せろ!!」

「し、侵入シヤア!!」

警報を慣らそうとしていたのを撃ち、警報も破壊する。他の司令部要員は全員指示に従っていた。この中には看守の言っていた白衣の男はいなかった。司令部のカメラにも映っていない。

「おいお前、この施設で何をしている」

取り敢えずの聴取として、服がこの中で一番派手な男に聞いた。

「こ、ここでは、深海棲艦との戦争に勝つための研究を……」

「ふーん、何処が資金や物資、サンプルを提供している?」

「局長が、自前のルートで調達していると」

「あの銃もか?」

「あ、ああ」

成程、黒だ。

日本が支援しているなら銃はあんなゲリラみたいなものではないしそもそも山吹元帥に伝えられるだろう。

「何故艦娘を攫った、彼女達は何処だ!!」

「研究のためとしか、それ以上は知らない!!」

言い終わった瞬間、頭を液晶に叩き付ける。

「さよならだ」

自作した爆弾を司令部に残し、去った。

## 化物

「うむ。そちらの状況は把握した」

「白露の艦装を回収し、こここの責任者を逮捕若しくは拷問し殺害出来次第脱出経路の確保に動きます」

通信室を使い山吹元帥に報告やこれからの予定を伝える。少なくともこの施設の責任者…研究者に洗いざらい吐いてもらわなければ。

「いや、中佐らは脱出を優先したまえ。現在地下貫通型の爆弾を搭載した航空隊が出撃準備をしている。数時間後には地下も含めて八島の敵組織は撃滅される。中佐も巻き浴いになる必要はない」

「…了解です」

爆撃がスムーズに行われることに安心するが、少しでも遅れればこちらも…。それに白露の艦装を回収できないと再生産などの問題で面倒臭いことになる。ここが何を目的にした施設かも気になるところだし…

「交信終了します」

「分かった」

通信機器の電源を切り、白露の方を見る。対人戦を経験していなかったせいかなり疲労していた。

「数時間後にここは爆撃される。元帥閣下は脱出を優先するよう命令された。だがそれじゃあ俺の気が治まらない。そこで白露、一人で脱出ルートを確認しろ」

「はい…はい？」

「俺は白露の艦装を回収した後こここの責任者をめる」

「え？…ええ！？」

白露に持つてきていた拳銃とマガジンを渡し、自分の身は自分で守れるよな、と言ひ扉を開けて出ていく。

白露への最低限の配慮として発見した敵は全て倒し、畏は解除をするなどをする。だが行く方向は違うので時々銃声が聞こえる。少し不安にはなるが艦娘の身体は丈夫だから大丈夫だと思つて進む。

「貴重品保管庫」

この場所に無ければもう打つ手なしの場所に行く。中には何かのサンプルや部品があり、その中に白露の艦装は混じっていた。

「…背負えばいいのかな？」

駆逐艦の艦装といえども重い物は重い。訓練学校で基礎知識として習った艦装の着脱を思い出しながら缶や電探のある背中に付いている艦装を付ける。次に魚雷発射管を足に付け、最後に連装砲を左腕に付ける。

クソ重い。

艦装はそもそも適性、つまり姉妹艦であつたりしなければ最低限の機能も動かない。そしてその最低限の機能には装着者が艦装を重く感じなくなるシステムがある。今の俺はこれが動いていないからキツイ。

「砲弾は…抜かれてるか。燃料と魚雷はあり、よ…!!」

リフレックスが働く。

周辺確認、室内に敵はいない。扉も開いていない。銃弾や爆弾が飛んできてもない。

「なんだ、これは」

取り敢えず立っている場所を離れようとしたとき、壁が膨らんだ。破裂する風船をスロー再生で見えるように、壁が割れて向こう側の景色が見える…はずだった。

「なんだこいつは!!」

そこにいたのは巨大。人のように直立二足歩行をし、立派な筋肉のついた腕を持つ巨体。しかしその顔は花卉が閉じているような見た目で、気持ち悪さを感じる。外観イメージ XCOM2の敵のバーサーカーそれはリフレックスの中でも普通の速さで動いていた。

「化物め!!」

何か武器は無いかと探す。銃は白露に渡してしまったのもうない。あるのはナイフ。ナイフをすれ違いざまに顔に数回刺す。

「|| ||!! (咆哮)」

「化物め…」

化物は怒り心頭といった叫び声をあげる。人間や普通の生物でも死ぬほど深く刺したのに余裕といった様子は少しの恐怖を感じる。

しかしそれほどどの生命力を持っているが、弱点も見つけた。飛び道具を持っていないことである。つまりここは一旦逃げて銃のような飛び道具を拾って戦えば出血多量でいづれ死ぬ。

「じゃあな化物」

化物が開けた壁の穴から外に逃げようとして、捕まる。

「|||||!!」

「やつべ」

捕まえている腕に力が徐々に込められていくのを感じる。このままだとぐしゃっとジュースになってしまう。しかもリフレックスがじわじわと効くタイプの死の所為か発動しないので手数が減ってしまふ。

「ちい」

腕や指にグサグサと刺してみるがあまり効いていないようで、手放してくれない。

「やつぱりそうか…でもここなら!!」

ナイフを投げる。現状使える唯一の武器を失ってでも行つた攻撃。ナイフが刺さつたのは

「|||||!!」

「痛いだろ?流石に目は効くだろう!」

化物が目を押さえて怯む。その隙に足に付けた魚雷発射管を弄くる。

「こいつも痛いぞ!!」

怯んでいる隙に大ダメージを与える為、発射管から魚雷を抜き、頭に叩き付ける。

「|||||!!|||||!!」

「うおっ!!」

流星は酸素魚雷だ。化物の首から上が文字通り吹き飛んだ。こちらも持っていた腕がかなり酷いことになっているが、しばらくすれば治るだろう。…治るよね?これだけの大怪我したことないから自信

が持てない。

「うええ、痛い」

色々とハプニングはあったが艤装は回収できた。後は見るだけ。

腕も無事に治り、安心して探索を続ける。あの化物がこの施設で生産されているのではと思っってしまったが、道中で見ることもなかったのだからイレギュラーだと分かる。

「…お前がここの責任者だな」

「そうだが…そういう君は何者かな」

そして白衣を着た男。あの看守の言っていたここの責任者である男は、所長室にいた。見る限りは丸腰。机の中に銃がある可能性もあるが、リフレックスの前では無力。だというのに余裕のある態度が俺を不安にする。

「堅谷…かたや、堅谷所長」

「そうだとも。けんや、と読み違えるなよ」

机の上の名前を見て、名前が分かる。

「ここで何をしていた。少なくとも軍の公認施設ではないだろう」

「そうだなあ。この施設の名前は堅谷研究所。軍…特に海軍には秘密の政府が創った機関さ。ここでは艦娘や深海棲艦の秘密について研究している。君だって両者の異常性という名の共通性には気付いているだろう？ 私の研究は艦娘を通じて深海棲艦の謎に迫るといってもいい」

「はっ」

演技。自分でも下手だと思いがそれでもやらねばならない。

「艦娘を通じて深海棲艦の謎に迫る？ バカバカしい。共通性はあっても同じじゃないだろう？」

「君こそバカバカしい。両者の共通性はもはや同族と言っても違いのないだよ。それはつまり、艦娘の生態を知ることによって深海棲艦を知り、有利な戦況の形成に繋がることになる」

「だとしても、この施設を軍は認知していない。そんなところの結果なんて、使われやしない」

「おいおい、それは海軍の話だろう?」

「私の…この堅谷研究所はね、陸軍のお偉いさんが手伝ってくれた機関だからね」

「…」

「ここで得られたデータは本土の陸軍省に送られ、さらにそこから陸軍工廠に送られる。そして工廠で作られた武器は戦場へ行き、深海棲艦を倒す。海軍がデカイ顔して歩けるのも今のうちだよ。わっはっは」

「そうだ。君ならきつとこう質問するだろう? 近海で行方不明になった艦娘はどうなったか、答えてあげよう!! 立派なデータになったのだよ!! 素晴らしいねえ、勲章ものだ。いや、実際に勲章を貰えるね。そのデータによって作られた武器を持つ兵士たちが」

堅谷はずっと笑っている。研究の成功を自慢するその姿はまるで子供だ。

「あんたの言っていることは確かに正しい。深海棲艦との戦いを海軍だけに丸投げしている現状は、提督と艦娘たちにとって大きな負担だ」

「そうだろうそうだろうか? ところがその現状は変わろうとしている。僅かな犠牲で!!」

「大きな犠牲だ!! ここハ島付近に来るのは戦闘・遠征問わず高練度の艦隊。それをあんたは殺したんだ!! この開戦から間もない、練度は全体的に決して高くないこの大切な時期に、あんたは殺したんだ!! 勲章をもらう兵士の何倍も丈夫で、何倍もの成果を挙げる艦娘を!!」

大声且つ早口でまくしたてる。だがそれでも堅谷は悪びれる様子もなく言う。

「ふーん。ところで、君は結局どこの所属なのかな? まあ、陸軍の所属ではないと思うが、一応ね?」

「…」

「答えてくれたっていいだろ? 私は君の質問に答えたんだ」



「…憲兵隊。大本営直属、提督訓練学校に配属されている」

「そうか。あの陸軍モドキの憲兵隊鎮守府守備隊から名前が変わっただけで、その守備隊は海軍創設の海軍指揮の海軍の機関。陸軍は引き抜かれた人材以外全く関係していないか。そう書いておくよ」

「あ??」

俺と堅谷の間の天井が破壊され、上から何かが降ってくる。

「まだ生きてやがんのか!!」

「ほう、初見ではないということとは、君がこいつを倒したのか」

化物は着地姿勢から直立の姿勢に移る。「待て」を言われたペットのように動かない。

「紹介しよう!!こいつはアグリ。データを採り終わった死骸から作られた堅谷研究所完全監修の生物兵器さ!!」

まだ始まっていない

「||||||!!」

「ほう、アグリも君の事を覚えていているようだね。それではここらでおさらばするよ」

堅谷は立ち上がり、奥の部屋へ消えていった。

「||||||!!」

化物は床を叩き、下の階に案内する。

「成程、闘技場か」

落とされた先は闘技場のような四方が囲まれたリングだった。

「あー、テストス。こちら放送席の堅谷だ。そこは職員の娯楽施設だね。そこでは本土から連れてきた被験者…ああ、人間のことだよ？彼らを戦わせて、勝った方は待遇をよく、負けた方は被験体にしたよ」武器になりそうなものはこの中にはない。持ってきた物はナイフ、弾のない主砲、水のない魚雷、同じく水のない燃料満載の艦装。銃は弾の種類が複雑で諦めた。

ナイフを構えながらも化物と距離を取る。堅谷はまだ何か言っているが聞いている余裕などない。

「||||||!!」

化物が近付いてくる。右ストレートをやるつもりだ。リフレックスになるよう、敢えて近付く。

リフレックスの中を比較的速く動くだけあって、一步踏み出しただけですぐに発動する距離まで詰められる。だがそれでも、発動すればその速さは失われる。

手に握るナイフで伸びてくる腕の関節部分を刺しまくり、一旦躲す。流れで背後を取ったら首を搔ききる。

「||||||!!」

「なんだ君のその早業は!!君はもしかしてだが海軍の生物兵器か!」

化物の刺し傷はすぐに塞がり、描ききった首も腕で抑えてすぐに繋がった。

「化物め…」

前回と同じように魚雷発射管から酸素魚雷を一本抜き、近付く。駆逐艦の必殺技を叩き込めば、大ダメージを与えられるのは分かっている。それを顔面ではなく首にぶつければ、流石に絶命するだろう。

「デリヤー!!」

「||||||!!」

「なっ!!」

警戒して死角から近付いたというのに、化物は俺をしつかりと捉え、捕まえた。以前のリフレックスが発動しない条件を、本能的に理解しているのか。

「ナイフが…」

魚雷に持ち替えてしまったため、ナイフは腰の方、握られている現状、取り出せない。

「||||||!!」

「いててて!!」

徐々に死が近付いている痛みがする。手に握っている酸素魚雷は必殺技で、こんなところで使つていいものではない。ではどうするか、簡単に言えば、殴るしかない。

「||||||!!」

白露の主砲で。

「||||||!!」

駆逐艦の主砲とは言え砲は砲。それで殴られれば痛くない筈がない。現に化物の手首を叩いたら、すぐに手放した。痛みを苦しんでいるように見える。

「ふん!!」

「||||||!!」

「放したな?化物!!」

アッパーのように酸素魚雷を化物に叩き込む。首から上が吹き飛び倒れる体に追い打ちともう一本を左胸に叩き込む。化物の身体は大きく欠損し残ったのは右腕と足だけになった。

「終わった…」

そう言い残し、落ちてきた穴から部屋に戻り堅谷を追う。奥の部屋

には闘技場の映像が見れるテレビとマイクがあった。画面に映る化物は残された三肢から血をどくどくと流している。

「どこ行きやがった」

部屋を見渡すが扉は入ってきたもの以外ない。窓や人が入れるサイズの通風孔もないので逃げられるはずがない。所長室の扉は化物が落ちてきた衝撃で開かなくなっていたから堅谷の身体能力的にこの部屋に逃げ道がないといえないのは神隠しになる。

「探すの怠いな」

手始めに本棚を倒した時、妖精が一体ひよこんと現れ壁にスプレーを吹きかける。するとその壁はみるみるうちに溶けていき、隠し通路が出てきた。

「お前何者だよ」

最大限の尊敬を込めつつその通路に入る。かなり狭く一人でも窮屈に感じてしまう。しかし誰かの髪の毛を見つけたことで俺以外にもこの通路を使った奴が…堅谷がいると分かり安心して追う。

出た先は滑走路だった。既に大型輸送機が滑走路に進入しており、エンジンが動けばすぐに飛べる様子だった。

「ここまで来るか!!殺せ!!」

堅谷は民兵集団…私兵隊に命令すると大型輸送機の中に入ってしまった。

「撃ち方始め!!」

私兵隊の隊長が声を発すると飛行機の護衛をしていた兵士達が撃つてくる。リフレックスが発動する前に近くの積まれた物資コンテナの中に逃れる。そこには弾薬が種類問わずたくさんあり、私兵隊の使う銃がどれだけ種類に富んでいるかを教えてくれる。

「弾だけでも色々使えるんだよ」

大口径のライフル弾を掴み、投げナイフの要領で外にいる私兵隊に投げる。深海棲艦の力で投げられたライフル弾は銃で撃つたのと同じで命中した兵士は次々と倒れる。

「うわぁ!!」

「所長!!早く脱出してください!!」

「逃がすか!!」

堅谷には飛ばす知識がないのか未だ輸送機に動きはない。

「堅谷ああ!!」

輸送機の中にナイフを構えてコンテナから出る。すると後ろから声を掛けられる。

「ロイ!!」

「白露か」

「うん。ここからなら飛行機で脱出できるよ」

「こつちもこの所長を追い詰めた。機装は後で返す」

白露が機内から撃たれないよう死角で待つようお願い、入る。輸送機の中は脱出準備ができていなかったのか、コンテナなどは積んでいなかった。そして堅谷はコックピットで機械を弄っていた。だがそれは輸送機の電気系統などではない。

「堅谷、お前を逮捕する」

「いいや、私は逮捕されない。そして君はアグニに殺される」

「アグニ？残念だがあいつは死んだぞ」

「ふっはっはっは。甘いな君は」

堅谷は笑っているが、俺はちゃんと化物の頭を吹き飛ばし、一般的に心臓がある左胸も吹き飛ばした。その後カメラ映像で再生できていないのも確認した。

「言っただろう？アグニは死体で作られた、死ぬとか死なないじゃない。死ねないんだ。ダメージを受ければ怯むし修復のために時間はある。だが死ねない。こちらの命令が受信され続ければ従い、仮に受信機が破壊されても最後の命令と現状から最高の判断を下せる。見たまえ、アグニが来たぞ!!」

堅谷の指差す先に視線を移せば、そこにはやはり化物がいた。吹き飛ばしたはずの頭も左胸も揃っていた。

「ありえない…あの出血量だぞ…まさかあの流血は肉体が溶けて再構築していただけなのか…」

そうだとしたらどうやれば勝てる。残っている魚雷は一本だけ。並の銃火器ではダウンさせることすらできない。これで逃げように

も追いつかれてアウト。

「止める!!アグニを今すぐ停止させるんだ!!」

「そうはいかんよ。だから…」

「!!ふぎけるなーッ!!」

やりやがった…。堅谷の奴、俺を殺すために、アグニに停止命令を出させないために、おそらくアグニをコントロールする機械をショート、さらに自殺しやがった。

「白露!!お前、操縦はできるか!?!」

「そ、操縦!?!できないけど、妖精さんならもしかしたら」

「ならこつちに来て妖精を手伝え!!」

輸送機から出て化物に向う。

「ロイはどうするの!?!」

「こいつをどうにかしておく。任せたぞ!!」

「ええッ!!ちよっ」

「|| || ||!! || || ||!!」

「来い!!」

考えろ、奴から距離を取りつつ考えるんだ。まだ本編は始まっていない。始まっていないんだ!!こんなところじゃ死ねないし、ルートはあるはずだ!!だから考えるんだ!!

## 脱出

研究施設内を走り回りながら逃げている隙に、幾つかの案が浮かんだ。

1 万が一化物が暴走した時に備え、安全装置や武器があるのでそれを探す。

2 生物兵器の処理室のような場所があるのでそこに連れ出し処分させる。

3 殺すまではいかななくてもダウン状態にし脱出、その後爆撃隊による爆撃で殺害、最低でも生き埋め

このいずれかである。堅谷のことだから1は既に破壊されていてもおかしくないが、2はあり得る。なにせ堅谷はここで深海棲艦と艦娘の実験をしていた。それはつまりここに死骸を作る何らかの設備があるはずだ。そこに辿り着ければ勝てる。

「白露、その部屋はこつちであつてるんだろいな」

「うん、処分室はロイの進んでいる方向のはずだよ!!」

そしてその設備のありそうな部屋は白露が既に発見しており、渡した通信機を通じて案内させていた。

「焦ってたから詳しくは見れなかったけど、確か熱で溶かす部屋だったはず」

「あの化物が大人しく溶けてくれればいいんだが」

蒸発までしてくれれば言うことはないが。

「融解室……ここだな」

入るとかなり複雑な機材があつた。

「化物が来るまでに準備を整えたら……よかつたんだがな」

足音からしても扉の前。今から準備をしても間に合わない、ならば。

「ここだ化物!!」

「|| || ||!!」

大声を出し、化物が加速しながら扉を破壊した所で奥の部屋に入る。

「ここを倒してどろどろのシチューにしてやる…」

「|||||!!」

残る魚雷は1本。これでダウン状態にし閉じ込め部屋の温度を上げて溶かす。簡単な仕事だ。

扉を閉め奴と向き合う。化物は威嚇なのか叫び声をあげ、口らしき部位から悪臭の酷そうな黄色の煙を出した。その時、爆発的なスピードで化物は走り出した。常人…超人でも対応できるか分からない加速で迫る肉塊はその形相も相まってとても怖い。とても怖いが…

「リフレックスが発動すれば怖くない!!」

化物は並の速度にまで落ち込む。

「手っ取り早く終わらせてもらおう!!くらえ!!」

ねじ切った鉄パイプを振りかざす。その先には化物の頭。既に頭を飛ばせば止まることは分かっている。

だからだろうか。化物もそれを理解しているからか、腕で鉄パイプを弾いた。

「ふざけるなよ…化物!!」

鉄パイプは弾かれた衝撃で折れ曲がり使い物にならなくなってしまう。

「肉塊でも学習するのかよ!!」

白露の主砲を睨みつけているであろう化物に叩き付ける。

「|||||!!」

「ぐおっ!!」

少しめり込んだと思った瞬間にはリフレックスが発動し、殴られる前に跳んで事なきを得る。

「あと一回…あと一回のリフレックスで仕留めないともう対応できない…」

リフレックスの連続発動は酷い頭痛がして動けなくなる。だが自分では制御できない。だから次のリフレックスでダウンさせないと大きな隙ができ、殺される。

「でやあ!!」

ポケットの中に残された数発のライフル弾を投げ込む。怪物はこ



れまでのものとは違う攻撃に対応できず銃弾がその肉体に沈んでいく。

一瞬の怯みを見逃さず、回し蹴りを喰らわせる。だが化物はその足を両腕で受け止める。

「バーカ、脚に何付けてるかよく見ろ」

脚に取り付けた艤装が音を立てる。

「|||||!!」

「ぶつとべ!!」

魚雷発射管から必殺の酸素魚雷が射出される。魚雷は化物が支えた脚から落ちていき頭に直撃する。

「…はあ」

また動き始める前に隣の部屋の装置を弄くり、超高温の熱波を出させる。化物は一瞬で蒸発し、肉体は消滅する。

「帰るか」

少し休んだ後、白露の待つ格納庫へ行った。

格納庫の中は増援の兵士でもいたのか死体が増えていた。

「あっロイ!!早く脱出するよ。急いで!!」

「おう」

「本当に急いで!!あと30分で日の出と同時に爆撃されるから!!」

余裕を持って動いていたが流石に焦って機体に乗る。機長席には妖精が、副機長席には白露が座っていた。

「飛ばせるのか?」

「うん。行けるみたい」

「みたいか」

機体が動き出す。地下格納庫なのでどれくらいで地上か分からない。暇と思いつつ席で座っていると外から僅かに物音と声が聞こえる。

「あれを見ろ、輸送機が動いてるぞ!!」

「撃て!!侵入者だ!!」

外から銃撃。装甲があまり厚くないのか弾が貫通している。

「ヒイヒイ!!」

「伏せてろ!!」

如何にか倒したいが飛び道具がない。そう思っていると操縦席の方から声がする。

「これを」

小銃が渡される。軍学校で使ったことのあるその射程は十分だった。

「ありがとう白露」

「違う私じゃない!!妖精さん!!早く倒して!!」

「おうわか…わかった」

操縦席の妖精から渡された銃で応戦する。敵の数は少なく、残党であることが分かる。

「暗いけど、空が見えたよ!!」

「爆撃まで時間はまだある、助かった!!」

機体の速度はより増していき、残党を振り切る。銃声が聞こえなくなったので座席に戻る。

「外に出たな…」

丸窓から外を見る。コックピットで白露が騒いでいたように八島を脱出していた。

「山吹元帥に報告しなきゃな」

地下から出たので問題ないだろうと通信機を取り出すが壊れていた。

「仕方ないか…機体備え付きの通信機でも使おう」

機体内を一通り探したが見つからなかったのでコックピットに入る。中では白露が寝ていた。

「…通信機あるか」

妖精は端にあつた機械を指差す。それを持って元の部屋に戻る。

「…元帥聞こえますか?ロイです」

「ロイか!?呼びかけても応答がないから心配したぞ」

「すみません、通信機が壊されました」

返事の声が思っていたものより大きく本当に心配していたんだと思うと嬉しくなる。

「脱出できました。ハ島で何が行われていたのかも分かりましたので、戻り次第報告します」

「分かった。待つてるぞ」

通信を終え、外を見る。そこには朝日と共に爆撃機隊が向かってきていた。

星に乗り換える為西方海域の友軍拠点に着陸し、白露を起こして機外に追い出す。コックピットの中には俺と妖精だけ。

「お前さん……この前水上機仕様の陸攻に俺を乗せて桜花使わさせた妖精だよな」

妖精は首を振って否定する。

「いや、お前さんだ。この銃は軍内で使われているものだがカスタマイズが俺仕様だった。そんなことができるのはよほど俺と同じ奴か俺をよく知る奴だけなんだ」

そしてこいつはなぜか俺のことを見ていた。盃二世の鎮守府で白露の場所を教え、バケツを運び、そしてカードキーを通したのはこいつだ。陸攻（水上機）を操縦し、桜花に乗せたのもこいつだ。そして今回、こうして輸送機を操縦している。

「そしてお前はついこの前まで檻の中だった。理由は親衛隊を特攻兵器に乗せたからだ」

「だから何です」

「喋った…」

「そりゃ喋りますよ…」

口調が相棒妖精と違い過ぎて怖くなる。こんなに追い詰めてひどいじゃないよな。

「正直言つて俺はそんなこと別にどうだっていい。山吹元帥から聞いてると思うが指揮下に入ってくれ。今後の戦争はより過酷さを増す。勝つにはお前の力が必要なんだ」

「本音を言ったらどうです。繕ったりせずにおいー世として話した

ら」

「…何のことだ」

「とぼけなくていいです。あなたがロイ・ヴィツフェ・ヒドルフではなくロイ一世なのは分かっています」

俺はロイ一世だ。だがずっとロイ・ヴィツフェ・ヒドルフでもあり続けたし、ロイ一世という語を知っている時点でおかしい。

「紅海の奇跡…あなたは本来、爆発によって負傷せず、次の作戦で合流するはずだった。だが運命が狂い、あなたは頭を負傷し入院、最後まで合流しなかった。彼女…陛下から聞いていた予言のわずか数パーセントの出来事」

「…」

「機内で声を掛ける予定でした。ですが聞いてしまったんです。曙との二重人格の会話を。自分はそれを聞いてあなたを監視しましたし記憶を漁らせてもらいました。そして元の人格に戻すため、桜花による特攻もさせました」

結果は無意味でしたけどねと悪気も無く付け加える。

「あなたの本当の目的は生きること。生きて艦娘と暮らすこと。違いますか?」

「…嫌だねえ」

「はい?何を言っているのです」

「こうして聞くと、自分のしたいことが気持ち悪く感じて嫌になっちゃう」

「…肯定と捉えさせていただきます」

「三つ子の魂百まで変わらず、俺は艦娘が大好きで気持ち悪い人間だよ」

いつぞやの記憶、艦これの記憶が蘇る。

「この世界も元は妄想の産物だしな」

「いいじゃないですか、願いが叶えられるチャンスですよ」

「お前…記憶漁ったならこの先何があるか分かるよな?」

「はい。でもだからって諦めるんですか?」

「そりゃ…無理だな」

ここにきてようやく俺は妖精に頭を下げる。

「俺は気持ち悪い人間だ。艦これが好きで艦娘と生きたい。だから頼む。生き残る為にその力をくれ」

自分で言っつて嫌になるクズさだ。だが、それが自分だ。

「…行きましょう。白露さんが待っています」

そう言っつて妖精は俺の横を通る。

「遅れないでくださいね、提督」

「…ッ!!ああ」

### 三人組

妖精と一通り話した後、星に乗って大本営に戻り山吹元帥に報告した。

「うーん、龍造の奴に相談しなきゃいけないなあ」

山吹元帥は報告書を眺めながらそう何度も繰り返す。

「研究データは回収できず、その結果がアグニという名の化物」

「はい。再生能力がかなり高く、数時間で死亡しても蘇生し襲撃してきました」

「バケツの受容体の変異した結果か…」

溜息を吐いて報告書を机の上に置きこちらを見る。

「まあよく無事で帰って来た。行方不明者の件は残念だが被害の拡大はこれで抑えれた。それに妖精とも出会えたようだしな」

「はい。今回はその件でさらに話があります」

過去の事より未来の事だ。特に今は未来のことを考えると時間はない。

「妖精がその手腕を発揮できる工廠、可能であれば一つ貸していただきたい」

「ああ…そうか。その妖精だもんな、工廠は欲しいな」

「はい」

山吹元帥にとっても相棒妖精は陸攻を水上機にし、さらに単独で桜花を作った技術モンスターだ。それと組むと言った時点でこうなることは分かっていたのだろう。

「まあいいが…大本営の第52工廠が空いていたはずだ。元々は工場だったから広さなら十分だろ」

「大本営内は陸軍の過激派への情報流出の恐れがあるのでちよつと…」

「うーむ、そうだなあ。大湊第三鎮守府…南方進出作戦を控える今、そんなところに飛ばせないなあ」

俺が八島から脱出した後、南方進出拠点設営計画の丸計画は成功した。つまり次の大規模作戦は非常事態にならなければ南方海域で行

われる。つまり寒い所に行かなくて済む（かなり重要）。

「そうなると思える工廠は…横須賀…」

「横須賀!!」

「横須賀郊外…戦争で売却されたので軍が購入した工場。ここか」

壁際の柵から資料を出す。それにぎつと目を通すとかなりの良い物件であることが分かる。

「ここをお願いします」

「ああ。それと君に新たな任務を通達する」

背筋が伸びる。

「新しく設立した横須賀第七鎮守府。そのの監査を願いたい」

「横須賀…第七鎮守府…」

「ああ。事前情報は拠点に行く車に載せてある」

「拠点?」

「ああそうだ。監査期間中、君が寝起きし指令を受け取る場所だ。車は表で待っている」

「は、は…ちよつと待ってください!!」

いけないいけない、横須賀第七鎮守府と聞いて忘れていたが俺はまだ訓練学校生だ。

「学校の方はどうなるんです?」

「心配するな、既に繰り上げ卒業として対処した」

「繰り上げて…そんなんで大丈夫なんですか!？」

「気にするな、お前はもう十分提督だ」

「意味が分かりません!!」

「妖精が言ってたぞ、特に学ばず特に得ず、既に必要以上のものを持っていると」

「そりやそうですが」

「じゃあ問題ない、V、出撃だ!!」

「ああもう!!」

反論は無意味と察して諦めていつものとは違う普通の車に乗った。南方関連で憲兵もかなり移動しており、信頼できて監査もできる憲兵

が俺しかいないとは山吹元帥の言うこと。だがこれで良かったのかもしれない。南方に駆り出されていない時点でかなり良心的だ。まだ何も準備できていないから外されたのかもしれない。

事前情報にはやはり提督・義明英朗と書いてある。クロですね、監査する必要もない、そういう運命だ。

つまりこれで本編開始直前の状態になった。色々忘れてる気がするがまあいいだろう。

「ここです」

「いや絶対違います。間違っている筈です」

「いえ、写真で見たと同じなので合っています」

拠点に着いた。そう、拠点に着いたはずなのだ。

「民家ですよん」

「民家です」

降ろされたのは割と大きめの一軒家の前。普通に住宅街。拠点って言うからもつとこう…軍事基地感がすると思っていた。

「それでは私はこれで」

「ご苦労様です…」

車は大本営に戻っていった。だからいつもの黒塗りの高級車じゃなかったのか…。門を開けて中に入る。本当に民家だ。監視カメラもセンサーもない。

「こんなに広くても一人じゃなあ」

「一人じゃありません」

「郊外の工場に行かないのか」

相棒妖精がいたわ。寂しさが減る。

「私もいるよ!!」

「お前は大本営に帰れ」

白露が玄関を開けて出迎える。私服だ。

「お前は艦娘だろ？南方海域行って来いよ」

「ロイの凄さを分かっていない人たちと艦隊は組みたくありません!!」



「たらい回しされた理由がよく分かったよ」

どうして態々ハ島で白露の艦装を回収したのか。放置しなくても爆撃で埋められるから技術漏洩はしない。情はあるが生死に関わる場面では二の次だ。じゃあ何故か？艦装があれば艦娘として出撃できる、つまり鎮守府に配属できるので次の作戦からおさらばできる算段だった。

「ここでのお前の仕事は？」

「監査のときにロイが盗聴器とか置いてくるからそれ見とけーって」

「うーん、分かった。頑張ってくれ」

任務があるなら追い出せねえ…。あの元帥押し付けやがった。

「任務を確認する」

切り替えだ。もう白露、俺、妖精の三人で義明を潰す。

「任務内容は横須賀第七鎮守府の監査だ。だが予め言っておく、クロだ!!」

「は、早くない？」

「そういうものです」

妖精のフォローがありがたい。

「よって俺達の目的は逮捕の為の証拠確保である!!」

「盗聴器と小型カメラの準備は出来ています!!」

「受信側はまだだけど今日中に準備できるよ!!」

「分かった。相棒妖精は白露を手伝ってくれ。終わり次第置く位置を決めよう」

「了解!!」

## 監査

外車に乗って監査先の横七に行く。道中はかなりの山道で、横須賀とは名ばかりの辺境鎮守府ではないかと思ってしまった。

横七に着く。ゲートには歩哨が二人。武器は…古いな。供給品ではない。

「止まれ、免許証と身分証を見せてもらおうか」

「これだ。監査のため大本営から来た」

「少しお待ちください…確認できました、どうぞ」

「ありがとう」

免許証と身分証を返してもらったために手を伸ばした瞬間に盗聴器を中に投げ入れる。暇な歩哨は何か口を滑らすのではないかという意見が白露から出たからだ。

車を止め、中に入ると中尉の階級章をつけた男が待っていた。

「私、横須賀第七鎮守府の憲兵を束ねています、宮本です」

「大本営で監査官をやっている、ロイ中佐だ」

「執務室まで案内します」

監視役か。憲兵隊長なら色々知っているだろうし聞いてみるか。

「提督…義明提督とは親しい間柄ですか？」

「いえ、私も彼もここが初の赴任地ですし、着任してから日も浅いからです」

「憲兵隊として、この鎮守府の艦娘と提督はうまくやっているとと思いますか？」

「ええ。まだ浅いですがそれでも信頼関係はあると思います」

この辺が引き時かな、取り敢えず盗聴器を服に仕込んで以降は何も言わない。

「ここが執務室です」

「案内感謝する」

「いえいえ」

扉を開けると中には義明がいた。

「君が監査官かね？わしが横須賀第七鎮守府提督、義明英朗だ」

「義明提督、数日間よろしくお願いします」

執務室をぐるつと見回す。

肖像画、無駄に高そうな机、雰囲気(float)が浮いているシャンデリア風の照明：着任からまだ日が浅いことを考えればこれだけ裕福なのは私費を投じていなければおかしい。

「どうした？そんなに見回して」

「いえ、私が監査した鎮守府の中で一番華美でしたので」

ONLY ONE で NUMBER ONE だぞ。喜べ。

「なくに、これくらい普通だよ普通」

「そうですか。ちなみにこの照明はどこ？」

「フランスの大手からだよ。オーダーメイドで輸入したからね、ざつと2億はしたね」

「ほお」

はい黒。絶対艦娘売り飛ばしたよね？君の生まれの家は富裕層でないし戦果も芳しくないから給与も高級家具をバンバン買える程でない。

「取り敢えず艦隊運営に関する資料一式を頂けますか？」

「ああ構わないよ。確かここに」

義明は机の引き出しから書類の山を出してくる。

「これでいいかね？」

「ありがとうございます」

それを貰ったら部屋から出ていく。そしたら鎮守府内をうろつく。

監査官の仕事の一つ、艦娘の様子を見る。艦娘は提督の仕事ぶりを見る良い指標と言われている。

優秀であれば明るく笑い、普通：指揮が悪くても人望があれば四苦八苦しながらも必死に訓練し、何もかもが悪ければ絶望している。

そして艦娘が多くいる場所と言えば艦娘寮である。外観は普通だが補修がされていない。入り口には憲兵が3人。

「生まれ、この先は艦娘寮だ。通行証はあるか」

「監査官」

「ッ、確認しました。どうぞ」

憲兵は俺が中に入ったのを見ると何処かに連絡している。

「提督、監査官が艦娘寮に。：はい、分かりました。車の事故ですね、連絡します」

おおっと、穏やかじゃないですねえ。

「待て、立ち入り禁止だ」

穏やかじゃないですねえ…。

「監査の為大本営から来た、ロイ中佐だ」

「：監査官か。失礼した」

「いや、気にすることはないよ、長門君」

戦艦長門、BIG7の一角。この鎮守府でもリーダーポジションか。

「幾つか君達艦娘にも質問したいことがあるんだ。いいかい？」

「構わない…」

「そうだね、取り敢えず食堂に案内してもらおうか。時間も良いしね」

食堂なら艦娘が多くいるので質問相手に困らないし盗聴器を仕掛けられていたとしても音が多ければ聞き取れないだろう。

「分かった。案内しよう」

通された食堂は割と普通だった。中には艦娘が多くいたが食器には普通の食事が載っていた。

入ったときに視線が一齐に集まるがすぐに外れる。

「この席に」

長門に席を指定される。机に盗聴器を仕掛けることはしない。どうせ探されたときにバレては意味がない。

「まずは私が話そう」

一番手には案内をしてくれた長門。

幾つか質問をしたが問題無いの一点張り。質問相手を何度も変えたがそれは変わらなかった。

艦娘からの何かしらの証言は得られなかった。頼りになるのは執務室を始めとする様々な場所に着けた盗聴器や隠しカメラしかない。そう思って車に戻るとそいつはいた。

「…」

そいつは車の下に潜って熱心に何か作業をしていた。

「おいお前、車出すからどけ」

「ヒッ!!」

そいつは車の下から這い出て立ち上がろうとするがうまくいかず、転ぶ。その後は腰が抜けたのか尻もちをついたまま後退りするだけだった。

「大本営からの車に細工するのは反逆に等しい」

言いながら追い詰める。距離は常に保ち、茂みの方へと。

「それをこの私が許すと思うなよ」

塀に背中がぶつかり、これ以上は逃げれなくなる。そいつはこちらを怯えた目で見てくる。

「反逆は重罪、故に…極刑」

サプレッサー付きのハンドガンを懐から出し眉間に合わせる。そいつは銃口に目がより、声なく泣く。

静かに銃声が二度、波打つ。

壁には二つの穴。そいつ…江風は何が起きたか分からない顔でこつちを見てくる。

「死体を処理しなきゃな。取り敢えず車まで運ぶか」

返事はない。ただ見つめてくるだけだ。江風を肩で担いで車のトランクに入れて鎮守府を出る。車内に盗聴器類の物はない。

鎮守府から離れたので車を一度路肩に止め、トランクを開ける。江風はようやくやく喋った。

「あ、あたしはどうなるの」

「こちらの拠点にしばらく居てもらおう」

江風はそれを聞いてもう一度トランクの中で横になる。

「…後部座席に座らないのか」

「あつ…」

そこで自分の現状を把握できたのか、立ち上がり後部座席に移る。だが不安な表情で、視線の先は安定していない。

車を再び出す。道中での会話は無く、すぐに拠点の車庫にいた。

「拠点での生活はかなり不自由だと思う。外出は勿論、外部との連絡ができる全ての行動は禁止だ。監視もつけさせてもらう」

車から降りながら色々と言明する。車内でサボった分、幾つか話を聞かなければならないだろう。

玄関に立ち、鍵を差し込む。

「まあ取り敢えず、ようこそ…」

「お帰りロイ!!」

「タイミング…」

回す前にドアは開かれた。白露だ。エプロン姿で手にはお玉を持っている。

「ご飯にする？お風呂にする？それとも…」

視線が俺から江風に移る。江風はポカンと白露のことを見つめていた。

「これって浮気？」

「そんなもんじゃない。取り敢えずお前は江風を風呂に入れてくれ。…あいつは帰ってるか？」

「えっ、うん。分かったー。江風、こっち!!」

「わ、分かった…」

白露は江風を連れてお風呂に向った。俺はその反対…小型カメラの映像が何十もの画面に映されている部屋に入る。

「…怪しい動きはなし。工場もそれは同じ。盗聴器も…静かだ」

クロ要素が今のところ江風しかないが、疑惑は幾らでもある。不安な感情は押し殺せ。奴はそういう運命だ。

「提督」

妖精が部屋に入る。その表情から、工場はかなり良かったと分かる。

「かなり良い場所でした。さて、何を作りましょう」

「…兵士」

兵士。将来的にも今の内に確保しておきたい存在だ。

「…あれですね。分かりました。三日あれば形になると思います」

「頼んだ」

兵士、というのがクローンや人造人間の類ではない。機械に人工皮膚を纏わせたロボットだ。

というのもまず現状、南方進出がされるなら陸上型の深海棲艦もいるので陸上戦力がある。だが現在、日本陸軍はほぼ解散し特殊作戦群のようなのしかいない。つまり頭数が足りていない。そのため機械兵士を大量に確保して展開しないとHALOのコブナント、詰まる所海は制しているが陸が制せない状態になってしまう。

それにいつか来る決戦の為、戦力は艦娘以外も欲しい。

「武器とか…」

「前と同じものを。ただ銃は普通のカートリッジ式で」

装備一式：中華包丁みたいな剣だが銃としても使える某ゲーム作品のバンダナキヤラに憧れて作った長物トリボルバーだ。尤もリボルバーは向いていないから普通のハンドガンに変更だが。

「始めましたね」

「そうだな」

ロマンだけでできた想像の域を出なかった軍隊が、こうして妖精の超技術によって出来る。こんな地獄の運命だがこれと艦娘だけが良い所だ。

「さて、飯でも食べ…いや、白露を待とう」

この部屋に来る前にちらりと見たサランラップの掛けてあった食事を見て、もう少し映像を監視するのだった。

## 確信

「さて、食事も済んだし色々聞かせてもらおうよ」

空になった食器を洗う白露に見守られながら、100%黒の証拠である江風に尋問を行う。

「君はあのとき、車に何をしていた」

「エンジンに細工をして爆発するようにしろって、提督が」

「その提督は義明英朗で間違いはないな」

「ああ。急に呼び出されていきなり。こっちは知識なんて艤装の最低限の整備しかないのに」

この尋問も録音している。そしてこの回答は少なくとも俺の暗殺を計画し指示したことの証拠だ。

「それは大変だな。他にもこうしたことは？」

「うんや一度も。長門さんとか陸奥さんとかならあるかもしれないけど」

「長門とは話したが何も答えてくれなかったな…」

「そりやそうさ。艦娘寮には盗聴器があちこちに仕掛けてある」

「それを考慮して食堂の混雑時にやった。一応は騒がしかったから誤魔化せると思うが」

あの中で正確にこちらの会話を聞き取るのは至難のはずだ。声をかなり抑えたし、何かを知っていそうな子には筆談も試した。

「食堂は全席に盗聴器があるし一部の机は上から見えるよう監視カメラも付いてる。その座った席が混雑してても空いてたならそこは監視カメラ付きの席だよ」

「言われてみれば空いてたな」

「はいはい!!じゃあ江風たちはどこで愚痴るの?」

「そりやー訓練所だろ。あそこは砲撃の音が邪魔して聞き取れないから口許さえ見えなきや何言っても大丈夫だ」

「なるほど。他には」

「他に?他かー…夜の埠頭なら見られなければ大丈夫かー、確かそこにも盗聴器は無かったはずだ」



夜の埠頭：別人の証言が欲しかったらそこに呼ぶしかないか。

「提督が何か不祥事をやってるとか知らないか？」

「ああ。もちろん。憲兵隊と一緒に避難訓練と称して住民を一か所に集めてる間に空き巣してるらしい。その様子が監視カメラに写って警察と揉めてたし」

これが聞きたかった。江風以外に証拠がなく、家具や艦娘寮のボロさなどの疑惑しかなかった義明の有罪という運命を確信できた。

「妖精、警察の監視カメラの記録を持ってこれるか？」

「勿論です。避難訓練をした日時は？」

「この日の13：00から21：00」

「8時間分の録画データと可能ならその件に関する書類を。見るべき録画を選別したい」

監視カメラが増えたこのご時世で全ての録画を持ってきたら時間が足りない。

そして憲兵隊の汚職も分かったから全員を逮捕しても問題ない。

「データの回収と特定にどれくらいかかる？」

「一日あれば十分です」

「分かった。他の奴の証言も欲しいから明日も鎮守府に行く」

「あたしはどうするの？」

「白露と一緒にカメラと盗聴器で情報を集めといてくれ」

「一緒にがんばろ!!」

「頑張れ」

主に白露の相手を。

## 証言

夜の埠頭、涼しいと感じるか肌寒いと感じるかの微妙なラインの風を浴びながら、俺は待っていた。

証言者を待っていた。

江風から聞き出した盗聴器の位置から聞かれない場所、聞き取りにくい場所を探し出し何人かの艦娘にここで話したいと言った。そして待つこと30分、漸くそいつは来た。

「僕は時雨。 監査官さんとは色々と話したいことがあったから来たよ」

おおつと少しまずいかもしれません。 白露型駆逐艦時雨。 佐世保の時雨、である。それが今、明らかに敵意を持って俺の前に立っていた。

「約束の時間は10分前だ。 作戦なら失敗だぞ」

「ここに来るのに皆が色々としてくれた。 カメラとマイクを誤魔化すのは大変なんだよ、 監査官さん」

近付こうとしていたので一歩を踏み出される前に銃を構える。 江風にも向けたサプレッサー付きのハンドガンだ。

「ふーん、そうか。 そうやってやったんだね」

「何を」

「江風。 僕の妹を君は…」

ああ?…ああ。 そうか。 死んだことになっても可笑しくはないか。

「すまない、誤解だ。 江風は今こちらで預かっている。 重要参考人だ」  
「駐車場近くの茂みに空薬莢が二つ。 壁には銃痕が二つ。 江風は生きているのかな?」

「生きてるよ」

失敬な、俺が艦娘を殺せるわけないだろ、提督だぞ。 …いや、憲兵だわ。

「証拠がないから何ともだが、信じてくれ」

「悪いけど信じられないよ。このここにいる人間は皆」

「俺は外来なんだけどな」

「そうだったね」

時雨から銃口を外すことができない。艦娘というよりは深海棲艦と戦うときに似た感覚だ。外したら確実に攻撃される。反撃することを提督としてのポリシーが許さない。

「…これ以上、お互い臨戦態勢を続けるのは無意味だ。互いの目的を果たそう」

「分かったよ。だから銃を下ろしてくれないかな？」

「分かった」

銃を徐々に下ろす。完全に外したら何が来るのは分かっている。だとしても…こちらも限界だ。

「グウツ!!」

「江風の恨みだよ!!」

強烈な一撃が腹部に入る。無警戒…いや、ノーガードだったことと時雨が艦装…艦船のパワーで殴ったことで後ろに転がってしまおう。海に落ちなくてよかった。

「江風は死んだと聞かされた時、僕がどんな思いだったか分かる!?今まで苦楽を共にしてきた仲間が戦場で散ることすら叶わず売られて…編入してきた白露姉さんはすぐに転属にさせられて…唯一の妹は君に殺された!!この思い…どうすればいいのさ」

立ち上がりながら銃を構える。別人とはいえ嫁艦に銃を向けるのはこれが最後だと願いたい。

「その苦しみ…終わらせてやる」

「なっ!!」

どう足掻いても当たらないように2回発砲する。銃声はない。ただ甲高い空葉莢の落ちる音が響くだけだ。

「君の発言からこの鎮守府での艦娘売買の疑いが深まった。詳しい話を拠点で聞かせてもらおうか」

時雨を気絶させ、持ってきていた段ボール箱に入れて取り敢えずは艦娘寮まで行く。そこで長門にチラシと箱の中を見せて車に詰め込

み、発進する。

長門には俺が江風のみならず時雨も殺したという謂れのない罪を付けられないように見せた。そして憲兵にも重要な監査資料と言って通す。嘘は言っていない。重要な証拠だ。

大きめの一般住宅：という名の拠点に今日も帰ってきた。鍵は自分で持っている。左腕で鍵を使っている間は右足で時雨の入った段ボール箱を支える。人が：艦娘が入っているとは思えないほど軽い。「あつ、お帰りロイ。何か分かった？」

「ああ。それよりもあいつは？」

「江風と一緒に監視カメラの録画を見てるよ。それよりもその箱は？」

「重要参考人が入っている。懐柔を任せただ」

玄関に箱を置いて自分も録画を見に行く。江風と妖精がそれぞれ4つのモニターを使って録画データを見ていた。

「どうだ？」

「戦果は十分ですよ提督。明らかに鎮守府所属の憲兵が民家に押し入り家財を運んでいる様子が幾つものカメラで見えました。窃盗だけですが、ガサ入れを要請する十分な理由です」

「いやー、執務室とかに会った高級家具、どっから来たのかと思ったら、こんなところからね」

「他にもある。時雨と話したところ艦娘売買を行っている可能性がある。参考人として連れてきた」

「時雨が!!今下にいるのか!?!」

「ああ、行ってきてやれ。喜ぶと思うぞ」

「ありがとうなロイ。それじゃあ行ってくるぜ!!」

勢いよく江風が飛び出す。

「扉位閉めてけ」

自然と扉が閉まる。江風の座っていた椅子に座る。

「時雨の証言次第で明日にも突入を提言する。そっちの準備は大丈夫か?」

「録画データの回収は30分で終わりましたし確認は二人がやってくれていましたので、今日も工場の方に行ってました。仲間を呼んで作業したので、既に戦闘用人工人間：提督が言うところの海兵隊員の製造が始まりました。スパルタンの方はアーマーがまだ設計できていないので」

「大まかな趣旨で海兵隊員を作るのか：やべえな」

ビックリドツキリメカも心臓を潰す超技術。まさに横七である。これでいい。戦う為には必要なのだ。

「それでは早速聞かせてもらおうよ。義明英朗は艦娘売買を行っている、そうなのか？」

「正確には憲兵隊長の宮本。あいつが艦娘を、皆を売り捌いている」

「提督はそれを知っているのか？」

「ううん。提督は宮本が艦娘を使って何か商売をしているのは知っているけど水商売とか風俗とか：そんなものに使ってると思ってる。けど宮本から相当なお金を貰ってるし、売却先の人と何度も会ってる」

宮本：ああ、あの道案内した男か。本編にいなかったから忘れていた。あれが艦娘売買の犯人か。

「一応聞くが：宮本を中心とした憲兵隊の逮捕は確定として提督を逮捕するとしたら：君は反対するかい？」

「そんなの：聞かないですよ」

「…」

「僕はあの鎮守府にいる全ての人間が嫌いだよ。整備員、憲兵、補給隊、事務方、総務：全員艦娘売買を知ってる。全員が僕たちを奴隷として見てる。：全員捕まえて。全員罰して!!」

「元帥に報告をした。明日の昼に大本営の憲兵隊が突入する。それまでに俺は鎮守府に突入、義明と宮本を確保、艦娘寮を防衛する」

「了解：ですが、他に援軍はいませんよ、提督」

「単騎か」

盃の鎮守府のときは他の部隊が艦娘寮を押さえて人質や道連れを

防いだ。だが今回は提督の義明と艦娘売買の中心と考えられる宮本を先に確保して逃亡を阻止したい。そうなると突入は確保後になる。そうなると艦娘寮は囲まれていると考えていい。前回のように俺が陽動になれないし…。

「潜入で先に拘束、突入前に艦娘寮に行ければ…」

「艦娘たちに武装させます？」

「馬鹿言っちゃいけない。彼女達是对深海棲艦に長けてても対人戦はできない。憲兵は腐ってても訓練は受けている。勿論、艦娘が蜂起した時の対処法も」

事実、陸戦隊だったので多くの訓練は免除だったが艦娘の鎮圧術などは免除とならなかつた。おかげで時雨を気絶させるのに手間取らなかつた。

「海兵隊員は今日中に10人生産できます。訓練も最低限は出来るでしょう」

「よし、計画はこうだ」

俺は10時頃に鎮守府に潜入。義明と宮本を拘束し艦娘寮の防衛を行う。海兵隊は可能な限り隠密を行い、艦娘寮を目指し防衛を行う。戦闘は発見されるか憲兵隊が突入するまで控える」

さあ、何か忘れていることが多い気がするが本編が始まる。努力は惜しまない、卑怯な手も使う、だが必ず生き残る。

ミス

頭に叩き込んだ監視カメラの位置を思い出しながら鎮守府内を進む。江風と時雨によって全ての位置が分かっているの、気を付けるだけでいい。

最初に行くのは憲兵詰め所、宮本を押しさえる。

宮本は艦娘売買の主犯なので確実に逮捕しなければならぬのに加え義明よりも賢い節がある。義明を先に確保したら何らかの形で察知されてもおかしくはない。

「白露、海兵隊の方はどうだ」

「問題無いよー、ジャックしたカメラで見てるけど執務室前も詰所も動いてないよ」

「分かった」

相棒妖精は海兵隊の指揮を執っているが行く前にカメラを全てハッキングしてこちらから見れるようにした。白露はそれを使って情報を送ってくれている。余談だが時雨と江風は大本営にて詳しく話を聞かれている。

詰所前に着く。中の人数を把握する為、壁に耳を当てる。

一人。宮本だ。

「失礼します」

「ろ、ロイ監査官!?ど、どうやって…」

動揺している宮本を置いて近付く。奴の手は机の上に出ているに銃を隠していても使えない。

「こちらの書類について、少し聞きたいことがあります」

「あ、ああ。何でしょう?」

左腕で書類を顔の前に突き出し視線を集める。少し不自然だが奴も動揺のせいで従ってくれている。

「はい、聞きたいことは…」

右腕で紙を突き破って宮本の頭を掴み、机に叩き付ける。

「大本営で聞かせてもらおう」

手錠をかけ布袋を被せ、布で包む。既に気絶しているが運搬時に目覚めたら面倒なので保険としてだ。

「聞こえるロイ？ 大本営の憲兵さんが後5分で着くつて」

「少しゆっくりし過ぎだな」

監視カメラに映らないだけのルートを走る。出会った奴らはすれ違いざまに気絶させ、絶対に報告が飛ばないようにする。下っ端も捕まえたいが最重要の宮本と次点の義明は何が何でも逃げさせてはいけない。

執務室にまだいることを白露に確認してもらったら3回目のノックと同時に入る。

「失礼します、義明元帥」

「な、なんだ。それに、それは一体」

「早急に見ていただきたいものが」

宮本を包んだ布を机の上に置く。何か言う前に言って速攻で済ませる。

「開いてください」

「あ、ああ…みやも…!!」

「ウリヤア!!」

見る為に下げた頭に対して両腕を振り下ろす。意識が飛んでいる間に宮本と一緒に包む。これで逃げられる心配はない。

「憲兵隊が正門を突破したよ!!」

「妖精に戦闘開始と通達しろ、俺もすぐに行く」

「分かった!!」

銃声はすぐに響いた。正門から聞こえてくる銃声からして突破に苦労はしていないようだ。やはり、宮本がいないことで憲兵隊は混乱状態になっている。

「艦娘寮に近づく人影はないよ、ロイ!!」

「よし。この分なら焦らなくても…」

「止まれ!!」

「ダメそうだな」



この鎮守府の憲兵が三人、既に銃を構えた状態でこちらを見てい  
る。先手は取られた。

「貴様、貴様のせいで俺達は…」

「殺す、絶対に殺してやる!!」

「死ねえ!!このクソ野郎!!」

引き金に指が…。考えろ、リフレックスモードでの早撃ち：リフ  
レックスモードになっている状態で二人を下ろし、銃を出すのは難し  
い。それに今は宮本と義明を背負っている。避けれない。

防御、銃撃を防ぐ…壁になりそうなのは無いしこいつらには情報  
を吐いてもらわないと困る。

よって答えは…

「待て!!」

話をするしかない。

「もし、君達が私に協力してくれたら、南方への左遷や逮捕ではなく協  
力者として報償を出すよう元帥に進言しよう。仮に君達が私を撃つ  
て殺しても、君達が捕まるのは変わらないだろ」

「うるせえ!!ごちゃごちゃ言うなアツ!!」

「そ、それに、たかだか監査官が、俺達を英雄に出来るわけないだろ!!」

英雄：協力者ならまだしも英雄になれるなどと俺も思わない。こ  
のゲスめ。

「これを見ろ」

二人を下ろし、懐に手をゆっくりと入れ、そして一瞬で銃を取り出  
す。

「なっ!!」

「そんな話、あると思うなよ」

「こいt…」

無罪放免になる可能性を見れると思って油断していたのだろうか、  
引き金から指は離され、銃口も下がっていた。そんな相手に反撃をさ  
せずに勝つなど、造作もない。

腕に数発撃ち込んだら足にも一発撃ち込み倒れさせる。

「て、てめえ!!」

「死んでないだけマシと思え」

蹴りで気絶させ、二人をまた運ぼうとしたとき、館内放送がかかる。

「こちらは大本営、元帥直属の憲兵隊だ。無駄な抵抗は止めろ。そちらの指揮系統は完全に崩壊した。各自武装解除しろ!!」

「仕事が速いな…」

特に戦闘に参加しないまま、鎮守府の制圧は終わった。

「こちらが義明と宮本です。特に宮本は重要な情報を吐くかもしれない  
せん」

「成程。ご協力ありがとうございます。中佐」

「ああ。ところでこの鎮守府の後任は誰か決まっているのか？」

「いいえ、そこまでは」

「そうか。鎮守府内の盗品は必ず持ち主に返しとけ。それと義明の肖像画や像は捨てる。歴史的価値も何もない、ただのゴミだ。後任の迷惑になる」

「了解しました!!」

さてと、こちらも一通りのことはやった。明日の午前中には時雨と江風も鎮守府に戻るだろう。後はこちらがやるべきことはないだろう。憲兵としての職務は全うした。売買の中心人物の宮本も捕まえたし…

ちよつと待て。

思い返せば横須賀第七鎮守府：横七で本編のときに艦娘売買なんてあったか？義明はただの無能クソ害悪で艦娘を解体しまくっていたり補給や入渠をしなかったということが考えられそうなストーリーを立てたが売買はしてなかったはずだ。

そもそもとして、確か本編は始まりとして憲兵を全員倒してから義明を倒し、そのまま就任だった。つまり既に本編に入っている状態のはずだ。

「何か…致命的なミスを…犯してしまった気がする」

「ていと…中佐」

相棒の妖精に話し掛けられる。名前何にしようか。

「それよりも、あなたのやったミスですが…」

「なんだ、教えてくれ」

呼び名を決めることよりも大切なことは本編と現状がどうしてこんなに違うのかを知ることだ。

「あなたがあなただからです」

「？」

何を当然なことを…。俺は俺。ロイ・ヴィツフェ・ヒドルフではなくロイ1世。注意すべきことは1世の1は漢数字ではないこと…。

ロイ・ヴィツフェ・ヒドルフではなくロイ1世であることが、ミス？

「詳しい動きは知りませんが、本来ならあなたは今、あの五人と共に南方に偵察に行っていました」

「あの五人？」

「鳳翔、大和、夕張、吹雪、曙の五人です」

「ああ…ああ!？」

関係が薄すぎて忘れてたわ。あいつらずっと北方だもん。寒いのが嫌いだから自ら行こうとは思はないし。

「あなたが南方に行っている間に宮本は憲兵隊内のいざこざで事故死。この鎮守府では艦娘売買が終わる筈でした」

「そして宮本を失った義明はガバガバ無能指揮を行う、と」

「はい。皮肉にも宮本は艦隊運営は義明よりも才がありましたから」

こうなると喜べばいいのか悲しめばいいのか分からない。艦娘売買は轟沈と違ってまだ再会の可能性はあるのだから。

「そして次、艦載機の動かし方」

「飛龍と蒼龍…」

艦載機の飛ばし方を教えた空母艦娘、…妖精探しに夢中で艦載機の動かし方なんて頭を過らなかつた。

言われて「ああ…」となったが、多くの原因はこの妖精が占めている気がする。五人と行動できなかつたのはこの妖精が現れないからであり、動かし方などを教わっていないのはそんな時間は妖精探しで潰れたからである。

「分かりますか？あなたはあなたになってしまったが故にこの状況を作り出しています」

「だとしても…な」

「ですが、これを好機と考えましょう」

妖精は土に小学生のように木の枝を使ってものを描く。

「まず、この鎮守府。艦娘売買によって残っている娘たちは深く傷つきました」

「そうだな」

「ですが、沈んでいないのなら、再会のチャンスはあります」

「宮本に情報を吐かせて商人を追い、卸先で保護」

海を越えた可能性は皆無な現状、国内を探し回ればいずれは見つかる。

「そして、嬉しい誤算は義明の代わりに宮本がいたことです」

「悪役俳優が代わっただけでは？」

「いいえ、義明はよくも悪くもあなた同様、深海の血を継いでいます」

「初耳学…ハイフリ編の強化の奴か？」

本編の続編のときに義明は殺したのに強くなって帰ってきてた(雑に省略)。それを考えると納得できる話だ。

「ですが宮本は全くの無関係。故に再登場はありません」

「嬉しいことだ。次に見るのは尋問会であることを願いたい」

「はい。そして義明はまだ懲役刑で済む可能性がありますですが宮本は死刑となるでしょう。よって復讐戦は避けれます」

義明は本編にてしばらくしたら巨大な空母を連れて復讐に来た。だがそれは罪が軽く懲役刑で済んだからだ。しかし今回は艦娘売買。死刑が適用される。主犯ではないが十分に適用はありえるし仮に懲役刑でも生ぬるいところではない。

「では、今あなたがとるべき行動は何か」

「決まっているよ」

お前に話し掛けられたときから、それは決めた。何なら結果すらも決めた。

「お前の名前、暫定だがアイにする」

「ええ？」

我ながら素晴らしいセンスだ。相棒の相と俺を支える正しく一心同体となる存在、つまるところ俺自身（I）を掛けた、途轍もなくいい名前だ。ジョニーなどという下痢に悩まされ注射が苦手そうだったり、変装が得意そうな名前よりも断然いい。

「し、白露さんにも聞きましょう」

「勿論!!」

余談だが、白露はかわかこ（可愛い見た目だけどカッコいい）妖精と提案し、二対一でアイに決定した。

## 演者

「先の軍法会議で義明中佐は禁固50年。宮本大尉は極刑が決定した」

これが、新しい任務があると伝えられて元帥室に出向いてすぐに言われたことだった。

「宮本は今日、尋問が予定されている。既に情報は持っているが新しいものが無いかの確認だ。そして義明は自鎮守府内の把握すらまともに来ていなかった。それに加え作戦計画書を宮本を通じて一部流出させていた。少なくとも終戦まで、奴は試される大地から一步も出さん」

当然の報いだ。宮本にも義明にもそう思える。だが、同時に義明には可哀想とも思えてしまう。奴は本当に知らなかった。ただ無能なだけだった。そう考えて、無能で信頼のないのに提督になったことが罪なのだ、この結論に至る。

「義明は父が大本営に勤務していると聞きましたが」

「義明正蔵大将のことか？あいつもこれに同意していた。むしろ極刑じゃないのを不思議がっていたぞ」

「…素直に褒めれませんね」

「俺もそう思う」

義明英朗の父親の義明正蔵は10数年前から將軍だった。だから俺はてつきり正蔵大将が中佐まで昇進させたと思っていたが、どうやら周りが勝手にさせてたようだ。

「そ、それで…新しい任務は？陸上で活動する深海棲艦が目撃されたと聞きましたから、やはり南方？」

現在作戦が展開されている南方海域で陸上型深海棲艦が発見されたという報告を大本営は受けていた。艦娘たちの攻撃では有効打が与えられず、航空隊も星がタコ焼きにやられて全滅するという太刀打ちできていない状況だった。

あの五人も装備の関係、大発や内火艇、三式弾がない現状ではどうしようも出来ない。つまり、陸上で深海棲艦と戦える存在が必要だ。

そうなるのと必然的に俺は南方に行くことになる。…と、思っていた。

「いや、陸上型の出現は以前から予測されていた。今回は特殊訓練を受けた精鋭憲兵隊…陸戦隊の試験運用も兼ねて彼らが南方に行く」

「では私は？」

「これを」

マル秘と書かれた資料を受け取り、読む。

「横須賀第七鎮守府の艦娘売買に関する詳細な販売先」

「ああ。と言つても一つだがな」

宮本が誰をどこにいつどれ位の値でどうやって売り、どうやって金と艦娘を交換していたか。その全てが詳細に書かれたものが今、手の中にあつた。

「どうしてこれが」

「大淀君が義明中佐から処分を命令されていたが隠していた。ファインプレーだ」

「売られた艦娘は輸送コストと隠蔽のため全てを一度に運ぶ」

「そうだ。運ばれたのは君が出向く10日前。これに関しては運がなかった」

「売った先は…オークション会場？」

場所は郊外の空襲で破壊された劇場だ。

「日時はまだ余裕がある。君にはここを襲撃。艦娘の保護と訪れた連中と運営している連中を逮捕してほしい」

「了。こちらの戦力は？」

「君と妖精…アイと名付けたんだっただか。必要なら白露君もつけるが…」

「結構です」

「分かった。君とアイ君で行いたまえ」

「ふ、二人だけですか？」

「そうだ。君と、アイ君。大丈夫だ。君達の英知の結晶でもってすれば、問題ない」

「…分かりました」

英知の結晶…つまり海兵隊の投入が許可された。白露もいないし

落ち着ける。

「白露君には昨日北方から到着したあの五人に南方へ連れて行ってもらおう。そこで勘を取り戻してもらいたい」

「確かに……ここ一週間は艦装を着けてませんか」

白露は艦娘、海が主戦場であって盗聴器の録音を聞いたり録画データを確認するのが仕事ではない。当然の出陣だ。

「この後から準備に入ります」

「そうか……待て。これから宮本の尋問だ。見ていくか？」

「気乗りしません、監査を行った身として最後まで付き合いたいです」

「よし、付いてこい」

「あれが宮本か。思ったよりも痩せてないな」

「いえ、筋肉が無くなっています。この場合、元から痩せていたので分からないだけです」

椅子に括りつけられた宮本はこの前の清潔感がある生真面目な好青年から一変して腐敗していきそうな中年になっていた。これが本来の姿なのだろう。憲兵長として疑われないよう最善を尽くした結果がああ的好青年であり、本質はこれなのだろう。

「俺は……死刑か？」

「ああ。艦娘売買、情報漏洩、物資の横流し……極刑だ」

「そうか……」

喋る為に上げた頭を再び下げケケケと力なく笑う。だがその雰囲気、諦めの色は無かった。

「中佐、それに元帥。取引をしないか？」

「取引だと？」

「ああそうだ。お前らは売られた連中を取り戻したいだろ？」

「当然。そもそもとして憲兵は鎮守府を守る為に創設された。艦娘の保護も管轄だ」

「そうだよな中佐。だが……お前は売った先を分かっているのか？」

「なに？」



「売った艦娘の数は両の手では足りない。勿論、売った先もな。そしてその情報は俺の頭の中にしかない。お前らは売られた艦娘の数と名前は分かっても取り戻せない。そうだろう？」

再びケケケと笑う。だが今度は高笑いだ。

「俺はお前たちに情報を渡す。だからお前らは俺の罪を失くせ」

「馬鹿なことを言うな!!」

「待て中佐。…宮本大尉。その提案、乗ろう」

「元帥!？」

「いいねえ!!」

「ただし!!嘘偽りや既に得ている情報であれば減刑はしない!!」

「分かるよ。俺も艦娘の名前と金額しか言わなかったらキレてる。その条件でいこう」

尋問が録音されていることを知っている宮本は、確実な言質を得たことに喜びながら全ての情報を洗い浚い吐いてくれた。人数、名前、売り先、金額、売った先のこと、時間、場所、運び方…全てを言った。

「さあ元帥、この錠を外せ!!」

「宮本大尉、君の最終的な処罰を言い与える」

全員が立ち上がり、俺は宮本の前に立つ。

「君は極刑だ」

銃を抜き、額に銃口を押し付ける。

「ちよつと待てよ!!俺は情報を全て…」

「そうだ。君は全ての情報を吐いた。義明中佐にも同様にね」

「なっ…」

「我々は君が義明中佐に提出した報告書を入手している。つまり、君が話した情報は既出だ」

元帥が提案した、何も知らないことを装い、減刑と情報の取引にのることで情報の抜けがないことを確認する作戦は完全に大成功を収めた。

「そんな馬鹿な…あれは焼き捨てろと」

「相手が悪かったな。義明中佐の能力を信じ、そして俺達を敵に回した。それが君の失敗だ。中佐!!」

「ま、まっ…」

「了!!」

銃声が一つ、大本営地下の尋問室で響いた。乾いたその音は、地上には届くこと無く、地下でただ、反射を繰り返すだけだった。

## 解放

「さあ、お次は1467年、応仁の乱で焼失したと言われてきた水墨画の名作『東山壯観図』2000万からのスタートです!!」

スクリーンに映された水墨画とオークションの司会の声を聞きながら待つ。ここは横七の艦娘たちが売られるはずのオークション会場だ。だが未だに艦娘はおろか艤装すら売りに出されていない、場が廃墟であること以外は普通のオークション会場だ。

「続きましては...」

寝よう。アイや海兵隊の連中は潜入に成功して待機中だ。少しの間寝ようとも問題ない。

ー

どれ位眠ったのだろうか、元から空いていた客席から更に人が居なくなつた頃、ステージに女が出てきた。

「あれは...」

「真のお客様方、大変お待たせしました。これからオークションに掛けられますわ、深海棲艦を唯一倒せる存在、艦娘です!!」

女は手足に枷が着けられ、衛生環境が悪い場所に居たのか青みがかつた髪もボサボサだった。

「実験に使うもよし、世界に売りに出すもよし、女として欲求を解消するのに使つてもよし。値が張りますよ?20億から!!」

「近付いて見てもいいか?」

手を挙げ司会に言う。司会は喜々としながらそれを許してくれた。ステージを上がり女の真ん前に立つ。

女の目は開かれていたが焦点は合っておらず、生きている死体と言つても差し支えがなかった。

「おい、加古」

「!!」

名前を呼んだ瞬間、まるで目覚めたようにこちらを見た。

いかなんな、嫁艦が売りに出されているという現実が腹が立って口調が強くなっている。しかも待ち時間が長かつたこともあつて直りそ

うにない。

「所属はどこか、言えるか？」

「あ、あんたは……」

「所属を言え」

「横須賀第七鎮守府……です」

「確認した。私は大本営元帥直属の憲兵だ。君達を助けに来た」

加古の目に光が宿る。希望を持った目はこちらを見つめた。

「他に何人いる」

「30人……」

「合致した」

屈み、一瞬にして足枷を破壊する。立ち上がったら手枷も同様に破壊した。忍ばせていた無線を付けて待機中の連中に合図を送る。

「出番だ、張り切っていけ!!」

天井から10人も男が現れ、客を締めていく。

「何だ貴様らは!?!」

「憲兵隊だ!! 大人しくしろ!!」

「憲兵!?!に、逃げろ!!」

司会はバックヤードに逃げようとして、止まった。いや、止まらざるを得なかった。

「制圧完了しました」

大男が小脇に男を二人抱えて現れた。

「御苦労、護送の準備とメンタルケアを」

「了解です」

アーマーが間に合わなかったスパルタンに新しい指示を出す。ミヨルニルアーマーが無くてもやはりスパルタン、劇場を完全に制圧してみせた。

「こいつ……殺してやる!! よくも、よくも!!」

司会は懐から拳銃を出し、こちらに向ける。場にいる部隊は全員意に介せず確保した連中の拘束をしている。加古は……ダメだ、恐怖で固まっている。

銃弾は一つ。放置していると当たる弾道なのでリフレックス状態

になり回転する銃弾を摘んで止める。

「何だこいつ、化物か!？」

「艦娘売って私腹を肥やす奴には言われたくないね」

再び撃たれる前に床に叩き付ける。肺の中の空気を吐き出させたら胸に蹴りを入れてダウンさせ、手錠で拘束する。

「アイ、護送車はまだか？」

「正面に到着しました。海兵隊員が付いていきます」

「スパルタンは周辺をもう少し見張ってもらおう」

客と運営は大本営に連れて行かれる。そこから先は知ったことじゃない。宮本の奴は数日間だったが監査対象だったから最後まで付き合ったがここにいるのはどうでもいい。

バックヤードに行き、拘束が外された艦娘たちを見る。目立った外傷は無いが誰も何も言わない。後ろに付いてきた加古もまた、何も言わずに目線を下げている。

「よく聞け!!」

声を張って全員に聞こえるようにする。

「これからお前らは大本営で入渠と休息を行い、元の所属の鎮守府に再配属される」

「元の鎮守府って・・・横七のことっぽ・・・こと、ですか？」

「そうだ、夕立」

「私、戻りたくない、です。あんなところに・・・」

「義明英朗や宮本大尉を始めとする所属していた連中は全員逮捕された。後任はまだ決まっていけないが悪いことにはならないだろう」

山吹元帥に話を聞いたところまだ未定とのことだった。いや、むしろ未定じゃないと困る。後任には俺がなる。

「宮本・・・あの男!!」

「死んだぞ。尋問室で処刑が執行された」

「なっ・・・!!」

「ホント? ホントに死んだの?」

「頭に銃弾撃ち込まれたんだ。死ななければ困る」

何かしらの・・・それこそないと思うが深海棲艦の血を輸血したら

復活した、なんて展開を避けるために死体は焼いて灰や骨は山に埋めた。海に撒くのは説明ができないが怖かった。

「終わった・・・終わったんだよね」

「どうした？」

振り返ると加古が膝を付いて泣いていた。加古だけじゃない、夕立も、宮本を恨んだ瑞鶴も。皆が膝を付いて泣いていた。

当然だ。宮本は彼女たちを地獄へと叩き落とした。その悪魔が死んだのだ。喜び・・・いや、恐怖から解放された安心感が、彼女たちを泣かせたのだ。

――

「全員いるな？」

「艦娘三十名、一、二号車に分乗しています」

「スパルタンチームも全員います」

「発車しろ!!」

護送車の屋根から廃墟となっても利用された劇場を見る。そこには笑いも喜びもなく、ただ涙と恐怖から解放された安心があつた。